

次期基本計画策定に向けた市民意見募集

みんなで作る 福岡市の将来計画 プロジェクト

実施報告書



福岡市では、平成24年に多くの市民の皆様とともに策定した第9次基本計画に基づき、これまでまちづくりを進めてきました。その結果、人口や市税収入は大きく増加し、市政に関する意識調査では95%を超える市民が「住みやすい」と答えるなど、元気なまち、住みやすいまちとして国内外から高く評価されています。

本報告書は、私たちが住む福岡市を次の世代に引き継ぎ、さらに魅力的なまちにしていくため、幅広い市民の皆様からご意見を募集した「みんなでつくる福岡市の将来計画プロジェクト」について、その実施結果をまとめたものであり、今後、市民の皆様から頂いた貴重なご意見を活かしながら、新たな基本計画を策定していきます。

令和5年12月

1 オンラインアンケート	①アンケート内容 ②回答件数 ③回答結果	P.03
2 メールや郵送等による意見の受付	①意見件数 ②意見分類	P.11
3 外国からの来訪者へのアンケート	①回答件数 ②回答結果	P.14
4 ワークショップ	①開催状況、参加者数 ②意見件数	P.15
5 ゲーム(マイクラフト)を活用した取組み		P.30
6 小中学校での意見募集	①アンケート内容、回答結果 ②福岡こども未来サミット	P.31
7 有識者インタビュー		P.37
8 民間主導の取組み	①実施内容 ②提言	P.78

1 オンラインアンケート

スマートフォンなどから、いつでも誰でも回答できるオンラインアンケートを実施し、多くのご意見を頂きました。

① アンケート内容

ア 「あなたにとっての幸せな未来のために特に大切なこと」を次の中からすべて選択

- ・ 運動、食事、睡眠など健康的な生活ができること
- ・ 仕事や多様な働き方が選べること
- ・ 住みたい場所に住めること
- ・ 誰もが思いやりを持ち、自分らしく生きられる社会であること
- ・ 災害や犯罪などの不安が少ないこと
- ・ 配偶者・パートナーと生活できること
- ・ 出産や子育てがしやすいこと
- ・ 自分や子どもが学びたいことを学べること
- ・ 家族の介護が安心なこと
- ・ 家庭や学校・職場以外にも居場所があること
- ・ 地域社会に貢献すること
- ・ 日常生活や市外への移動に交通機関が便利なこと
- ・ 身近に海や山などの自然があること
- ・ 文化・スポーツ・レジャー施設などが充実していること
- ・ その他(自由記述)

イ 選択した項目について、現在の満足度を4段階で回答

ウ 福岡市や自分自身の未来についての意見を回答(自由記述)

② 回答件数

8,242件

<年代別内訳>

18歳未満	18～29歳	30代	40代	50代	60代	70歳以上
83	838	1,771	2,158	1,725	1,094	573

<居住区別内訳>

東区	博多区	中央区	南区	城南区	早良区	西区	市外
1,521	1,146	1,185	1,314	622	1,090	1,007	357

③ 回答結果

ア 「あなたにとっての幸せな未来のために特に大切なこと」の選択割合(全世代)



イ 「あなたにとっての幸せな未来のために特に大切なこと」の選択割合(年代別)

年代 位	18歳未満	18～29歳	30代	40代	50代	60代	70歳以上
1	健康的な生活	健康的な生活	健康的な生活	健康的な生活	健康的な生活	健康的な生活	健康的な生活
2	防災・防犯	出産・子育て	出産・子育て	防災・防犯	防災・防犯	防災・防犯	防災・防犯
3	交通の利便性	住む場所	防災・防犯	家族の介護	思いやり・多様性	思いやり・多様性	思いやり・多様性
4	第3の居場所	防災・防犯	学びの機会	思いやり・多様性	家族の介護	家族の介護	交通の利便性
5	住む場所	仕事・働き方	仕事・働き方	仕事・働き方	住む場所	交通の利便性	家族の介護
6	出産・子育て	学びの機会	住む場所	学びの機会	仕事・働き方	住む場所	住む場所
7	学びの機会	交通の利便性	思いやり・多様性	住む場所	交通の利便性	文化・スポーツ等	身近な自然
8	仕事・働き方	配偶者・パートナー	家族の介護	交通の利便性	文化・スポーツ等	身近な自然	配偶者・パートナー
9	思いやり・多様性	思いやり・多様性	配偶者・パートナー	文化・スポーツ等	身近な自然	配偶者・パートナー	文化・スポーツ等
10	文化・スポーツ等	文化・スポーツ等	交通の利便性	出産・子育て	配偶者・パートナー	地域社会貢献	地域社会貢献
11	家族の介護	家族の介護	文化・スポーツ等	身近な自然	第3の居場所	第3の居場所	第3の居場所
12	配偶者・パートナー	第3の居場所	身近な自然	第3の居場所	学びの機会	仕事・働き方	学びの機会
13	身近な自然	身近な自然	第3の居場所	配偶者・パートナー	地域社会貢献	学びの機会	仕事・働き方
14	地域社会貢献	地域社会貢献	地域社会貢献	地域社会貢献	出産・子育て	出産・子育て	出産・子育て
15	その他	その他	その他	その他	その他	その他	その他

年代による主な特徴

！ **健康的な生活ができること** や、 **災害や犯罪などの不安が少ないこと** は、
全ての年代で選択割合が高かった。

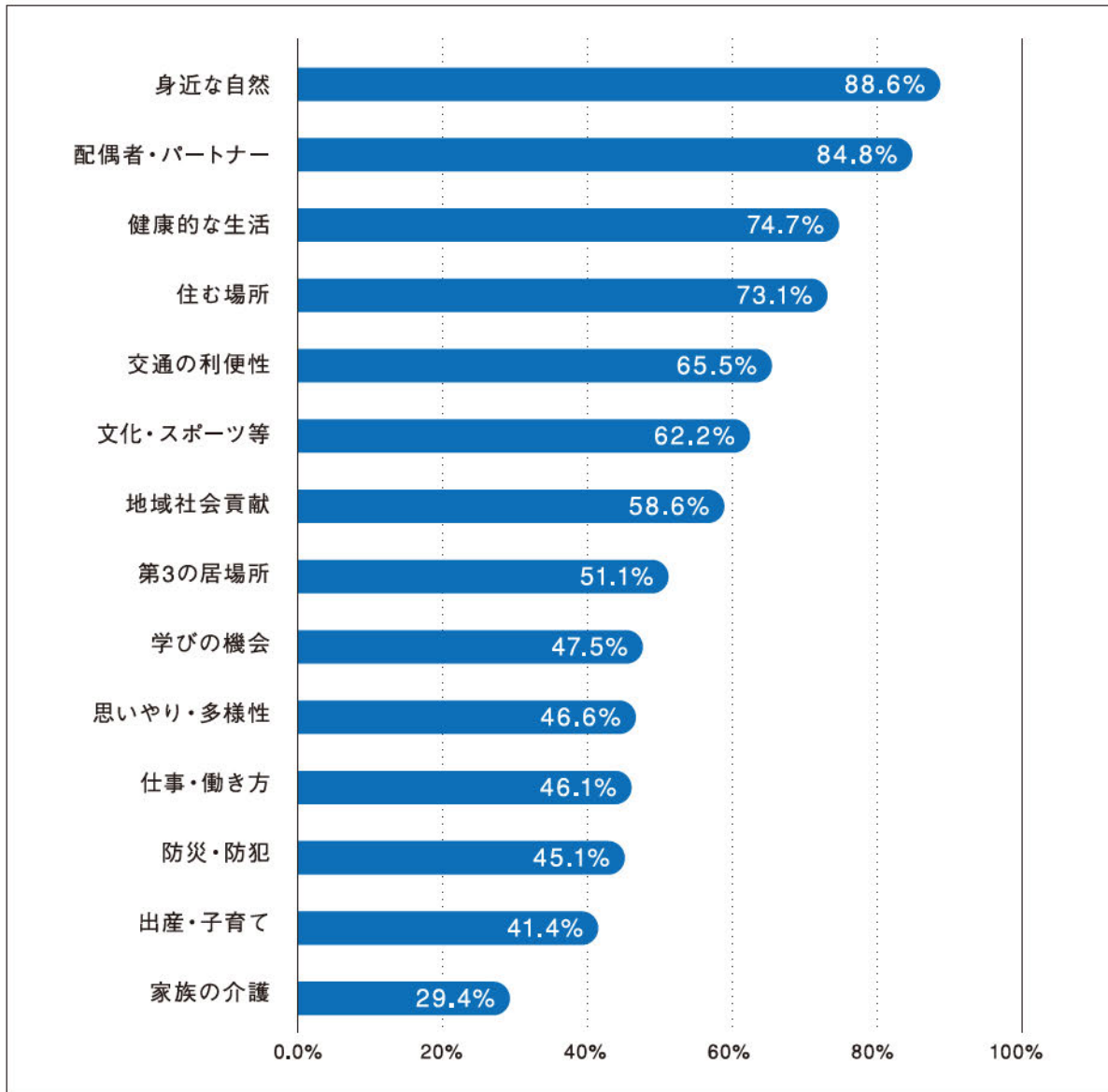
！ **家庭や学校・職場以外にも居場所があること** は、全年代では47.7%で、13番目
だったが、18歳未満では68.7%で4番目に高かった。

！ **出産や子育てがしやすいこと** は、全年代では51.1%で、11番目だったが、
18～29歳では72.7%、30代では76.9%で、いずれも2番目に高かった。

！ **交通機関が便利なこと** は、全年代では60.0%で、6番目だったが、
18歳未満では69.9%で3番目、70歳以上では65.3%で4番目に高かった。

！ **身近に自然があること** は、29歳以下では43.5%で、13番目だったが、
年代が上がるほど上位となり、70歳以上では49.2%で7番目に高かった。

ウ 選択した項目の現在の満足度(満足+やや満足の割合)



エ 「あなたにとっての幸せな未来のために特に大切なこと」の自由記述項目(抜粋)

- ・ 友人・仲間がいること
- ・ 外国人との交流があること
- ・ ペットと共に安心して暮らせること
- ・ 安定した収入が得られ、安定した生活が送れること
- ・ まちに活気があること、今後も成長が見込めること
- ・ テクノロジーの活用が進んでいること
- ・ 戦争がなく、平和な世界であること
- ・ 気候変動に対応していること
- ・ 地産地消が実現できていること

オ 福岡市や自分自身の未来についての自由記述意見(延べ3,315件)

◎ユニバーサルデザイン、健康、福祉(504件)

分類	主な意見
多様性 バリアフリー	<ul style="list-style-type: none"> ○多様な人が自分らしく生きられるためのまちづくり(20代以下・南区) ○自由に選択ができる福岡市(70代以上・城南区) ○「お先にどうぞ」が当たり前の優しい市(40代・南区) ○1人でがんばって生活している人にも優しい福岡(30代・城南区) ○歩道の段差をなくし、自転車やベビーカー、車椅子でも安心に(50代・中央区) ○歩くのが楽しいまち(50代・中央区)
女性	<ul style="list-style-type: none"> ○女性が社会に出てもっと活躍できるように(30代・中央区) ○生物学的に力の弱い女性や子どもたちを守る配慮(30代・早良区)
高齢者 障がい者	<ul style="list-style-type: none"> ○70代になっても柔軟に仕事ができるシステムや意識づくり(60代・城南区) ○老後でも安心して暮らせる福岡市(40代・西区) ○介護することも幸せに感じられる福岡市(40代・博多区) ○高齢者になった時に生活できる場所の選択肢がたくさん持てること(40代・西区) ○心身に障がいのある人が得意な面を活かして活躍できる場づくり(40代・西区)

◎子ども、教育(652件)

分類	主な意見
子育て支援	<ul style="list-style-type: none"> ○保育園、幼稚園から大学まで教育費の無償化(40代・博多区) ○子育て支援の所得制限を無くしてほしい(30代・早良区) ○子どもを産む=お金と時間がとられるというイメージが変わるような支援(20代以下・東区) ○子育て女性のキャリア形成がしやすい社会(40代・南区) ○安心して子育てと仕事が両立できる環境(20代以下・南区) ○保育園の多様化(30代・市外居住)
子ども支援	<ul style="list-style-type: none"> ○子どもたちがのびのび遊べるところがほしい(60代・東区) ○自分が感じている以上の幸せを子どもたちが感じるができる福岡市(40代・南区) ○子や孫が大人になるのを楽しみに思える様に(70代以上・早良区) ○子どもが大人になった時も住み続けて結婚子育てをしたいと思えるまち(20代以下・早良区) ○障がいのある子でもいろいろな選択肢ができる社会(40代・南区)
教育	<ul style="list-style-type: none"> ○実際の社会での活躍に繋がりがある教育(30代・中央区) ○子どもが自分のやりたい事むけて学べる場所(40代・西区) ○教員を「笑顔で元気に働く大人」にしてほしい(50代・中央区) ○不登校の子の居場所を学校以外で増やしてほしい(40代・西区) ○小学校、中学校の学区制を廃止して選択制にしてほしい(30代・東区)

◎文化芸術、スポーツ（160件）

分類	主な意見
文化芸術	<ul style="list-style-type: none"> ○音楽やアートなどの芸術が街中で楽しめる (40代・南区) ○美術館や博物館にもっと力を入れてほしい (30代・博多区) ○コンサートホール、ライブハウス、大中小の会場 (40代・中央区) ○本に気軽にアクセスしたい (30代・南区)
スポーツ	<ul style="list-style-type: none"> ○自由に気軽にスポーツを楽しめる施設をたくさん作ってほしい (40代・西区) ○ランニング・ウォーキングコースの距離表示を増やしてほしい(40代・東区) ○日本代表戦もできるような球技専用のフットボールスタジアム (30代・東区)

◎地域コミュニティ（86件）

分類	主な意見
コミュニティ	<ul style="list-style-type: none"> ○コミュニティでお互い声をかけ合い、困った時にすぐ助け合えるようなまち (40代・南区) ○高齢者や子育て世帯が孤立せず、安心して暮らせる地域コミュニティ (50代・西区) ○利害関係のない人同士の交わりが日常的にできる第3の居場所 (60代・早良区) ○公民館を中高生の自習や高齢者の買い物など便利に使えるように (40代・博多区)

◎防災、都市基盤（161件）

分類	主な意見
防災 道路整備 住宅	<ul style="list-style-type: none"> ○災害、有事に備えるまちづくり (50代・中央区) ○子供でも老人でも安心して安全に歩ける道路整備 (50代・東区) ○自転車で移動しやすい道路整備 (30代・博多区) ○電信柱のないまちづくり (40代・南区) ○独り身の高齢者が安心して住める住居 (50代・東区) ○住みたいところに安価で安心して住める (40代・南区)

◎防犯、モラル・マナー（155件）

分類	主な意見
防犯 モラル・マナー	<ul style="list-style-type: none"> ○犯罪や事故が少ない安心して住めるまち (60代・西区) ○防犯カメラの設置を増やして犯罪を抑止 (40代・博多区) ○自転車への交通の取り締まりを強化してほしい (40代・西区) ○歩きタバコやポイ捨てのないまち (40代・東区) ○動物と一緒に暮らせる場所 (60代・南区)

◎環境、自然(158件)

分類	主な意見
環境 自然 緑・公園	<ul style="list-style-type: none"> ○再生可能エネルギーやEVの推進 (20代以下・城南区) ○リサイクルをもっと身近に簡単にできるようにしてほしい (40代・南区) ○自然を生かしたまちづくり (30代・西区) ○ほどよく都会でほどよく田舎っぽさが残るまち (70代以上・東区) ○花や緑に溢れたまち (50代・南区) ○幅広い年齢層の憩いの場となる公園 (20代以下・中央区)

◎交通(445件)

分類	主な意見
総論	<ul style="list-style-type: none"> ○市内隅々、交通の不便さの不平等を少しでもなくしていく福岡市 (70代以上・東区) ○鉄道のネットワークを、もっと充実させてほしい (50代・西区) ○バスの本数を増やしてほしい (60代・早良区) ○自宅から最寄りの駅までのアクセスが近い (50代・博多区) ○高齢者が「運転しなくてもよい」と思えるような環境づくり (50代・中央区) ○交通機関のタッチ決済を普及させてほしい (20代以下・南区) ○公共交通の混雑緩和が必要 (20代以下・博多区) ○市内中心部への交通流量の減少に向けた対策 (40代・南区)
各論	<ul style="list-style-type: none"> ○南区にも地下鉄を通してほしい (50代・南区) ○地下鉄の姪浜駅と橋本駅を繋げてほしい (50代・西区) ○ドームや国際会議場へのアクセス(50代・城南区) ○アイランドシティへの交通の便をもっと便利に (30代・東区) ○空港の国際線に地下鉄で行けるようにしてほしい (40代・中央区)

◎経済振興、都心部(299件)

分類	主な意見
企業誘致 雇用創出 働き方	<ul style="list-style-type: none"> ○日本で最も新しいビジネスが集まる場所(40代・城南区) ○有力な企業が誘致され、故郷を捨てずに活躍できる環境(30代・早良区) ○理系で勉強した子どもたちが働く場所の充実(50代・城南区) ○福祉職や保育士等の収入が増えるようにしてほしい(50代・早良区) ○リモートワークやフレックスタイム制などの多様な働き方を推進(20代以下・南区)
観光 レジャー施設 商業施設	<ul style="list-style-type: none"> ○福岡を象徴するランドマークがほしい(20代以下・中央区) ○福岡城の天守閣を再建してほしい(30代・中央区) ○大型テーマパークを作ってほしい(30代・博多区) ○商店街は残してほしい(40代・中央区)
農林水産業	<ul style="list-style-type: none"> ○農業や漁業など食の中心を担う人たちが力を発揮できる社会(60代・城南区)
都心部	<ul style="list-style-type: none"> ○天神に図書館を作ってほしい(50代・城南区) ○誰もが利用できる都会のオアシスみたいな緑多い場所(70代以上・中央区)

◎国際(59件)

分類	主な意見
国際化 共生	<ul style="list-style-type: none"> ○世界の人々が来てよかった、住んでみたいと思えるまち(40代・中央区) ○外国人が日本人のコミュニティでも自然に馴染める社会(20代以下・早良区)

◎その他(636件)

分類	主な意見
その他	<ul style="list-style-type: none"> ○古き良きものを残しつつ進化してほしい(40代・博多区) ○自然や食べ物、お祭りなど地域の特性を活かした福岡らしいまちづくり(60代・城南区) ○九州全体発展のキーマン(40代・中央区) ○福岡都市圏としての成長戦略が必要(60代・早良区) ○デジタル技術の活用で、さまざま便利で生産性の高い社会(50代・城南区) ○必要な人が必要な情報を受け取りやすい環境(40代・中央区) ○次世代のチャレンジを応援できるまち(30代・東区) ○美しい建物を建て並べ、緑豊かな街並みを誇るまちづくり(60代・早良区) ○物価高を抑えて労働賃金を増やす(50代・博多区) ○都市部ばかりではなくて郊外の方にも目を向けてほしい(30代・東区) ○行政などに声が届きやすい社会(60代・南区) ○行政での相談が一つの窓口で全て完結できるシステム(50代・東区) ○2050年以後も持続可能なまちづくり(50代・東区) ○大好きな福岡市。老若男女住み良いまちであり続けてほしい(50代・城南区)

2 メールや郵送等による意見の受付

オンラインアンケートだけでなく、メールや郵送など、多様な手法で意見を受け付けました。

① 意見件数

区分	件数(延べ)
小学生からの作文、工作等	49
高校生、大学生からの提言	6
自治協議会からの意見	25
メール	21
郵送	5
その他(来庁、電話等)	37
計	143

② 意見分類

分類	件数(延べ)
ユニバーサルデザイン、健康、福祉	11
子ども、教育	17
文化芸術、スポーツ	6
地域コミュニティ	11
防災、都市基盤	6
防犯、モラル・マナー	19
環境、自然	14
交通	14
経済振興、都心部	22
国際	4
その他	19
計	143

◎工作

アイデア

駐車場付きマンション
・9階建てで、屋上に
駐車場がある

カフェ
・食事を取るところ
・道の側に花壇がある

ホテル
・緑地はここでとる
・壁にはプールがある

動物園と水族館

し字型マンション
・小さな公園がある
・自然豊か

ロープウェイ
・上りと下りがある！

飲食店、カフェ



アイデア

商店街でいろんな物が買える

ツリーハウスのホテル
木でできたホテル。

果樹園
いろんな果物
をとれる

ウォータースラ
イダー
泊まりに来た人
限定

遊具
みんな
で遊べる

バス停
山に来る人
がバスに
乗ってくる



花



3 外国からの来訪者へのアンケート

プロジェクトの実施期間中に開催された「世界水泳選手権2023福岡大会」の機会を捉え、各国からの来街者に、福岡市の「良かった点」と「物足りなかった点」についてアンケートを実施しました。

① 回答件数

503件

<回答者国籍>

フランス、ドイツ、スペイン、イタリア、イギリス、アメリカ、カナダ、メキシコ、オーストラリア、中国、韓国、香港、台湾、インド、タイ、シンガポール 他

② 回答結果

「良かった点」上位5項目

	項目	選択割合
1	食事	74.6%
2	人の親切さ	72.4%
3	交通	47.3%
4	歴史文化	35.2%
5	おもてなし環境	31.0%

「物足りなかった点」上位5項目

	項目	選択割合
1	多言語表示	19.7%
2	キャッシュレス決済	10.5%
3	Wi-Fi 等通信環境	10.1%
4	交通	6.8%
5	宿泊	5.8%

【選択項目】

- ・ 食事
- ・ 体験(アクティビティ)
- ・ 買い物
- ・ 人の親切さ
- ・ 自然
- ・ 歴史文化
- ・ 交通
- ・ 宿泊
- ・ ナイトタイム
- ・ 世界水泳大会のおもてなし環境
- ・ 多言語表示
- ・ Wi-Fi等通信環境
- ・ キャッシュレス決済
- ・ その他

4 ワークショップ

高校や大学、市民サークルなど、多様なコミュニティに市職員が参加し、参加者自身や福岡市の未来について一緒に考え、語り合うワークショップを開催しました。

① 開催状況、参加者数

45回、1,278人

No.	開催日	団体名等	参加者数
1	R5.2.22	板付小学校	106
2	R5.6.5	九州産業大学	97
3	R5.6.10	筑紫丘高等学校	30
4	R5.6.10	福岡高等学校	50
5	R5.6.10	ZEXT 九州支部	47
6	R5.6.19	福岡大学	29
7	R5.6.21	学びを楽しむ会	10
8	R5.7.6	九州経済調査協会	13
9	R5.7.11	西南学院大学	21
10	R5.7.25	上智福岡中学高等学校	5
11	R5.7.28	Togatherland	14
12	R5.7.30	ZEXT	97
13	R5.8.5	mie	15
14	R5.8.26	福岡テンジン大学、 福岡地域戦略推進協議会、 福岡未来創造プラットフォーム	54
15	R5.9.6	福岡空港地域対策協議会	7
16	R5.9.8	福岡大学	46
17	R5.9.11	tatamama	13
18	R5.9.11	福岡外語専門学校	22
19	R5.9.12	福岡市の10年後を考える会	9
20	R5.9.19	九州大学	11
21	R5.9.30	福岡テンジン大学	23
22	R5.10.4	福岡大学	34

No.	開催日	団体名等	参加者数
23	R5.10.6	福岡教育大学附属福岡小学校	34
24	R5.10.10	博多まちづくり推進協議会	26
25	R5.10.15	ミニふくおかサポーター	31
26	R5.10.16	福岡大学	11
27	R5.10.17	福岡アジア都市研究所、福岡市	82
28	R5.10.20	唐津街道(箱崎宿)プロジェクト	17
29	R5.10.20	福岡大学	10
30	R5.10.22	ミニふくおか子ども実行委員会	60
31	R5.10.25	福岡の食と農の未来を考える会	15
32	R5.10.25	三菱電機株式会社九州支社	28
33	R5.10.25	福岡工業高等学校	14
34	R5.10.28	School Social Agent	18
35	R5.11.1	福岡教育大学附属福岡小学校	36
36	R5.11.10	理学療法士と産後ケアについて考える会	8
37	R5.11.13	福岡女子大学	15
38	R5.11.16	小呂島	14
39	R5.11.16	介護と美容のこれからを考える会	15
40	R5.11.16	福岡大学	11
41	R5.11.17	九州大学	5
42	R5.11.18	ツバメの印刷所	10
43	R5.11.19	福岡未来創造プラットフォーム	17
44	R5.11.20	福岡大学	34
45	R5.11.24	いふくまち保育園・ ごしょがだに保育園 ウヒアハひろば	14

② 意見件数

961件

分類	件数(延べ)
ユニバーサルデザイン、健康、福祉	158
子ども、教育	131
文化芸術、スポーツ	26
地域コミュニティ	34
防災、都市基盤	37
防犯、モラル・マナー	67

分類	件数(延べ)
環境、自然	95
交通	81
経済振興、都心部	119
国際	37
その他	176

◎ワークショップの様子



◎ワークショップの様子



WORKSHOP

◎ワークショップの様子



◎ワークショップの様子

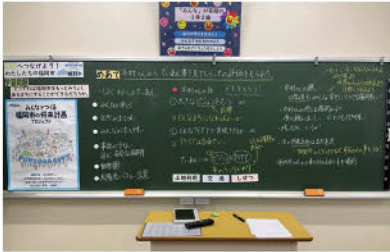


WORKSHOP

◎ワークショップの様子



◎ワークショップの様子



WORKSHOP

◎ワークショップの様子



◎ワークショップの様子

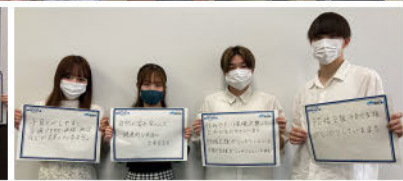
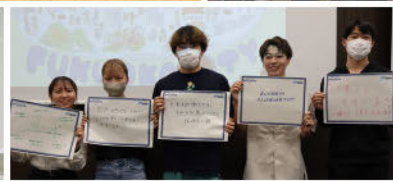


WORKSHOP

◎ワークショップの様子

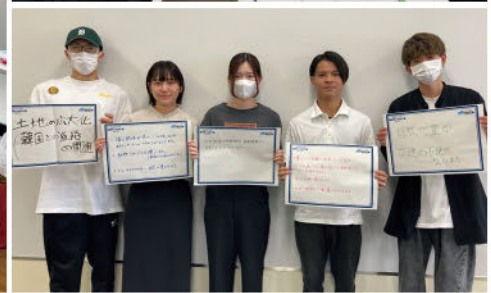


◎ワークショップの様子



WORKSHOP

◎ワークショップの様子



◎ワークショップで描いた福岡市の未来像

みんなで作る
福岡市の将来計画
プロジェクト

子ども遊び場である公園や
地域の自然を大切に
子どもの教育にやさしい街!

みんなで作る
福岡市の将来計画
プロジェクト

自分の夢を
叶えられるまち

みんなで作る
福岡市の将来計画
プロジェクト

子どもの教育に
充実しているまち

みんなで作る
福岡市の将来計画
プロジェクト

介護と子育て
が両立できる
福岡!!

みんなで作る
福岡市の将来計画
プロジェクト

将来の福岡市へのぼくわたしのアイデア

ビジョン
ゴミが落ちてなくてきれいな福岡市に!

アイデア
ゴミが落ちてなくてきれいな福岡市にするために公園や建物にも、その他にいるところにも、沢山ゴミ箱をおく。そしたら市民の人も気持ちよくなると思いました。

理由
ゴミ箱がたくさんあると自然に捨てるという気持ちが育ち、それが色々な人に繋がっていくと思うから。

みんなで作る
福岡市の将来計画
プロジェクト

福岡で就職したい
思えるような企業が次山
立地していること。

みんなで作る
福岡市の将来計画
プロジェクト

10年後の福岡市は...

DX化を推進して、
業務を効率化し、
自分の時間を充実
させられる街になってほしい!!

みんなで作る
福岡市の将来計画
プロジェクト

公共施設や商業施設、医療機関が
充実して住みやすいまち

みんなで作る
福岡市の将来計画
プロジェクト

子育てしながら
仕事もプライベートも
楽しめるまちにする!

みんなで作る
福岡市の将来計画
プロジェクト

国際的、知恵、人の
交流の促進。

みんなで作る
福岡市の将来計画
プロジェクト

将来の福岡市へのぼくわたしのアイデア

ビジョン
外国の人でも安心して楽しく暮らせる街に!

アイデア
・お店の人が英語が喋れるようにする。
・お店に〇〇円と書いてあるところの下に外国のお金の値段を書いているものを増やす。
・外国語の番組を作る

理由
日本語がわからない外国人でも商品の値段分かるようにするため。
日本語がわからない外国人でもテレビが見れるようにするため

みんなで作る
福岡市の将来計画
プロジェクト

年齢を重ねても病気に
自分らしく働ける
多様な働き方を
推進するまち

みんなで作る
福岡市の将来計画
プロジェクト

"家族"以外の
居場所・コミュニティが
たくさんあるまち。

みんなで作る
福岡市の将来計画
プロジェクト

外国人に優しい街
公共交通機関の音声案内を
多言語にする。
福岡空港国際線へのアクセス向上
相談窓口における多言語対応
テーマパーク建設
ゴミ箱の多言語表記を大きくする。

みんなで作る
福岡市の将来計画
プロジェクト

個性を
大切に街

みんなで作る
福岡市の将来計画
プロジェクト

自然豊かな環境と最先端技術が
街であってほしい

みんなで作る
福岡市の将来計画
プロジェクト

不必要な交通混雑や
犯罪の心配がない、
ストレスフリーな街

みんなで作る
福岡市の将来計画
プロジェクト

〇防災意識の根付いたまち
〇大きなスポーツ大会が開かれるといいな
〇外国人の方(旅行)が歩きやすい鞋の案内
〇子育てを皆で協力する
〇自転車やスマートモビリティの活用
〇近くに子育て支援の施設が増えるといいな
〇いろいろなルールを整理

みんなまで
支え合う
福岡市♡

思いやり
思いあい
いはいの
福岡市

子どもたちのための
未来のために
みんなが
笑顔で
未来を
つくる

犯罪99%地域
防犯対策を
徹底しよう

海外進出のための
人材育成を
つくる

福岡市の
理想像

大型遊園地も
つくる

緑を増やす

明るく
ワキワキする
街

事故が少ない
安全なまち

快適な交通機関で
通勤・通学が
できる街

日本で愛される
観光名所
作りを!

子ども
中心社会

子どもが楽しく
遊べる街がいい

日本のモデル街
福岡

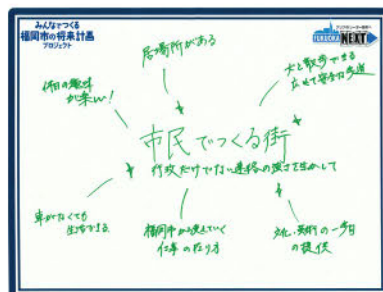
〜福岡から日本を元気に〜

安心・安全で
災害に強いまち

10年後、助け合いがあふれる
町にしたい!!

1. 困っている方を経験ある人が助け
られるようにしたい!!

2. 世代で分け隔てなく友達感覚
で助けられるように!!



福岡市の全員が
最先端
質の高い
治療を受けられる
まち!!!

緑が多い街

新鮮でおいしい食べ物がある
手に入りやすい
子どもからお年寄りまで
暮らしやすい町

アートで
活気あふれる
まち!

高齢者や障がい者が
活躍できるまち

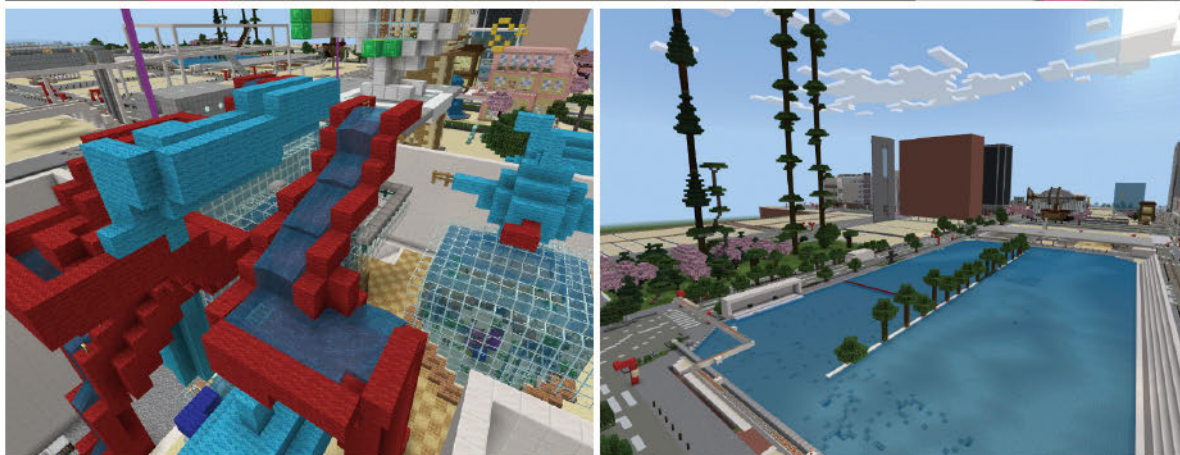
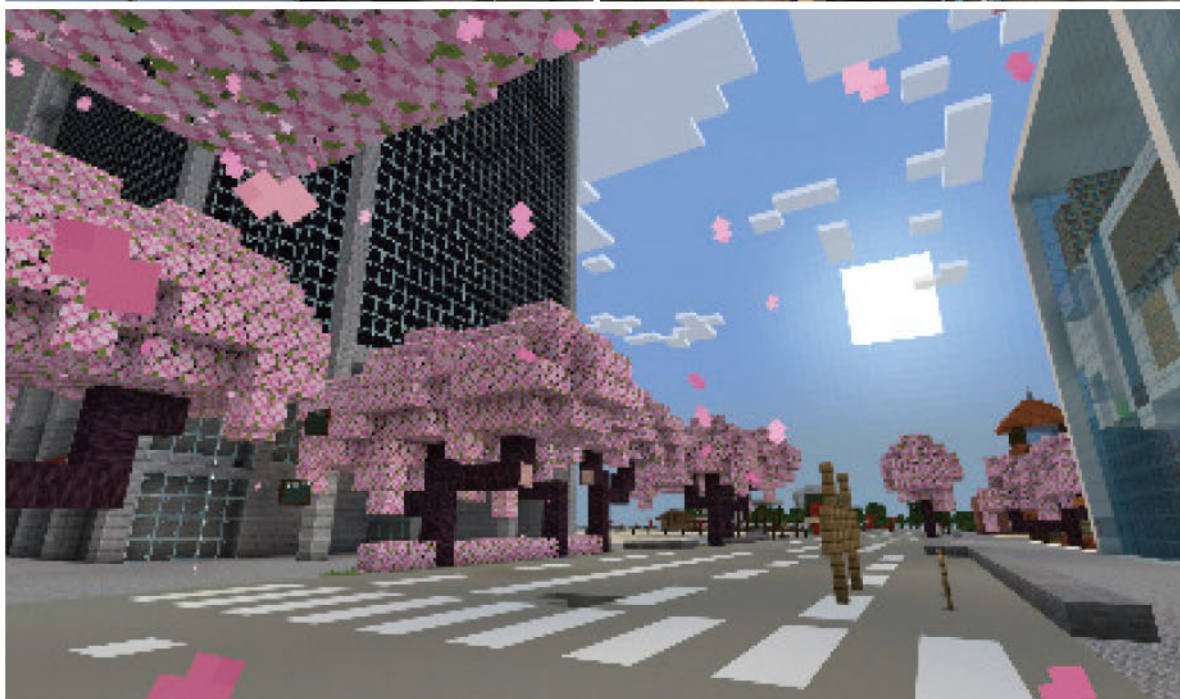
おうちの居場所が
たくさんある

笑顔あふれる楽しい街

※一部抜粋

5 ゲーム(マイクラフト)を活用した取組み

小学4年生～6年生の参加者18名が、ゲーム(マイクラフト)を使って「住みたいまちの姿」を表現する「未来のまちづくりプロジェクト in FUKUOKA」を開催しました。



6 小中学校での意見募集

約12万人の小中学生を対象に、一人一台のタブレット端末でアンケートを実施し、その結果を実行委員会の小中学生10名がとりまとめ、「福岡こども未来サミット」で「福岡市の将来像」を発表しました。

① アンケート内容、回答結果

質問1(全学年対象)

福岡市(小1・小2は「自分が住んでいるまち」)のことについて、それぞれどのように思っていますか。

項目	そう思う	どちらかと言えば そう思う	どちらかと言えば そう思わない	そう思わない
まちに木や花などの緑が多いと思う	47.9%	39.0%	9.8%	3.3%
バスや電車、地下鉄などの利用がしやすいと思う	61.0%	29.0%	6.7%	3.2%
買い物がしやすいと思う	66.5%	26.5%	4.9%	2.1%
しんせんでおいしい食べ物が多いと思う	61.5%	31.6%	5.2%	1.7%
文化や歴史などについて学ぶことができると思う	40.5%	38.9%	15.5%	5.1%
学校は勉強しやすい環境が整っていると思う	60.1%	31.3%	5.9%	2.7%
子どもやお年寄りが安心して生活していると思う	56.4%	33.7%	7.5%	2.4%
病気やけがをしたときに病院に通いやすいと思う	52.7%	33.5%	9.7%	4.2%
地域(まち)の人は協力し合っていると思う	59.0%	31.9%	6.6%	2.5%
自然災害(台風や地震など)が少ないと思う	44.2%	32.9%	15.4%	7.5%
犯罪(どろぼうや不審者などの事件)が少ないと思う	30.2%	33.7%	23.2%	12.9%
ルールやマナーを守って生活する人が多いと思う	40.5%	41.3%	14.1%	4.1%
遊べる場所が多いと思う	55.8%	27.6%	11.4%	5.2%

質問2(小3～中3対象)

福岡市がまちづくりを進めていくうえで、あなたが大切にしたいほうがよいと思うものはどれですか。



質問3(小3～中3対象)

福岡市のまちづくりについて意見がある人は、書いてください。【自由記載】

分類		件数
環境 (2,414)	みどり、自然、生きもの	1,711
	ごみ・リサイクル	350
	全般	162
	地球環境・エネルギー	102
	水辺	89
生活安全 (2,331)	防犯	697
	全般	633
	ルール・マナー	470
	交通安全	365
	防災	166
生活環境 (2,043)	全般	1,653
	景観	312
	動物・生きもの	78
産業 (1,241)	全般	728
	観光・娯楽	447
	農業・水産業	66
公園		1,075
交通 (951)	交通機関	591
	道路	360
教育 (741)	学校	631
	社会教育・生涯学習	110
福祉 (593)	障がい者	226
	高齢者	209
	全般	158
行事・イベント		508
子ども・子育て		454
思いやり・助けあい、協力・協働・交流等		414
スポーツ		374

分類		件数
保健医療		191
文化・芸術・歴史		140
国際関係 (130)	外国人施策	89
	国際理解・国際交流	41
その他	公共施設・行政運営	124
	人権・ジェンダー等	76
	労働	72
	SDGs	63
	科学技術	55
まちづくり全般		1,074
特になし等		4,851

②福岡子ども未来サミット

実行委員会の10名がまちづくりのアイデアを発表し、その内容を4つの都市像に分類して、小中学生によるオンライン投票を実施した結果、「自然にやさしく魅力あふれるまち」が最も共感を集める結果となりました。


◎発表内容・当日の様子

Aグループ

防犯

今、こうだから

意見募集の結果から犯罪や事件を不安に思っている人が多い



このような取組みを

- 大人や子どもが道徳的に考える機会を増やす
- 犯罪が起きやすい暗い場所を減らす
- 犯罪などを未然に防ぐための地域の人とのつながりや助け合いを引き続き大切にする

Aグループ

食

今、こうだから

新鮮で美味しい食べ物が多くと答えた人が多い



このような取組みを


- 地産地消（自分の地域のことを自分の地域で消費する）を進める
- 福岡県の美味しいものを県外にもさらに広める
- 他の都市の美味しいものも積極的に取り入れる

Aグループ

福祉

今、こうだから

障がいのある方や高齢の方への配慮が十分であるとは言いきれない



このような取組みを

- バリアフリーにさらに取り組む（道でこぼこなど段差を減らす）
- 体験できるイベントを増やすなど、いろいろな方との交流の場をつくる障がいのある方や高齢の方の話を聞く機会を充実させる




Bグループ

子育て

今、こうだから

- 子どもたちが遊べる場所が減っている
- 子育てをしやすい環境を整えることが必要



このような取組みを


- 保育所や幼稚園を支援する
- 小さい子どもがいる親同士の交流ができる場所やイベントを増やす
- 子どもたちがのびのびと安心して遊ぶことができる公園を整備する

Bグループ

交通

今、こうだから

- 区によっては、交通が不便なところがあるのでは
- 時間帯によっては、道路や車内混雑がひどいことがある



このような取組みを


- バスの本数を増やすことや、バス停が少ないところに設置する
- バスの魅力、使い方を知らしてもらえよう工夫をする
- 人の集まる目的地（天神や博多駅）行きのバスの本数を増やす
- 混雑する時間帯には、臨時便を整備する

Bグループ

交通安全

今、こうだから

- みんなが安心して生活できているのか分からない
- 今後、道路を通る車の量は減ることはない
- 交通事故がますます増えていくことが心配



このような取組みを


- 今もやっている交通安全に関する取組みを引き続き行う（小1ランドセルカバーや黄色い帽子など）
- ガードレールやカーブミラーを増やすなど事故が起きにくい道路づくり

Bグループ

食品ロス

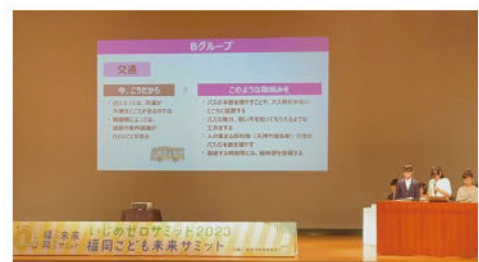
今、こうだから

- 食料自給率が低いのに、残飯が多いのでは？
- 食品ロス削減が必要



このような取組みを

- 各家庭での買いだめを控えることにつながる取組みをする
- 食品ロスに関するイベントをする（フードドライブやフードバンクなど）
- コンビニやスーパーなどで、商品を手前から取ることの大切さを伝える取組みをする



Cグループ

都市開発

今、こうだから

- ・都市部にはビルが多く、緑が少なくなっている
- ・買物に便利な大きなショッピングモールがある場所とない場所がある



このような取組みを

- ・新しく建てたビルなどの周りには、樹木を植えるなどして、自然とのまちとのバランスを大切に
- ・各地域に駅やバスなどの本数を増やす
- ・より多くの人が便利になるように買い物できる場所を増やす

Cグループ

環境

今、こうだから

- ・自然を大切にしたいまちづくりがされている
- ・普段の生活で自然と触れ合うことができるのか分からない



このような取組みを

- ・これからも今の自然を大切に取る取組みを進める
- ・福岡市の海や山などの自然を体験できるイベントをする
- ・リデュース、リユース、リサイクルなどごみを減らす取組みをさらに進める

Cグループ

防災

今、こうだから

- ・地域によっては浸水やけがけ崩れが起きる可能性がある
- ・大雨、台風、地震などに強いまちづくりが必要



このような取組みを

- ・災害に関する情報をいち早く伝える取組みを引き続き行う
- ・災害が起きたときの行動について学ぼうイベントを行う（避難所体験、地域防災訓練など）
- ・各地域の避難場所をさらに充実する



〈4つの都市像〉

自然にやさしく魅力あふれるまち <div style="display: flex; justify-content: space-around; margin-top: 10px;"> <div style="background-color: white; padding: 5px; border-radius: 10px;">食</div> <div style="background-color: white; padding: 5px; border-radius: 10px;">食品ロス</div> </div> <div style="display: flex; justify-content: space-around; margin-top: 10px;"> <div style="background-color: white; padding: 5px; border-radius: 10px;">環境</div> <div style="background-color: white; padding: 5px; border-radius: 10px;">都市開発 <small>(自然とのバランス)</small></div> </div>	誰もが便利で暮らしやすいまち <div style="display: flex; justify-content: space-around; margin-top: 10px;"> <div style="background-color: white; padding: 5px; border-radius: 10px;">交通</div> <div style="background-color: white; padding: 5px; border-radius: 10px;">都市開発 <small>(便利さの向上)</small></div> </div>
安全で安心なまち <div style="display: flex; justify-content: space-around; margin-top: 10px;"> <div style="background-color: white; padding: 5px; border-radius: 10px;">防犯</div> <div style="background-color: white; padding: 5px; border-radius: 10px;">防災</div> </div> <div style="background-color: white; padding: 5px; border-radius: 10px; margin-top: 10px; text-align: center;">交通安全</div>	子どもから大人まで笑顔で元気なまち <div style="display: flex; justify-content: space-around; margin-top: 10px;"> <div style="background-color: white; padding: 5px; border-radius: 10px;">福祉</div> <div style="background-color: white; padding: 5px; border-radius: 10px;">子育て</div> </div>



7 有識者インタビュー

様々な分野における有識者20名の方々にご協力いただき、福岡市の現在と将来について、インタビューを実施しました。

※実施日順

氏名	主な役職等	実施日
木藤 亮太氏	株式会社ホーホウ 代表取締役 株式会社油津応援団 取締役	R5.9.7
浅野 直人氏	福岡大学 名誉教授 元・環境省中央環境審議会 会長	R5.9.13
佐々木 一成氏	九州大学 副学長、工学研究院 教授 水素エネルギー国際研究センター長	R5.9.14
岡澤 恭弥氏	株式会社STOK 代表取締役社長 福岡市国際金融アンバサダー	R5.9.15
福岡 孝則氏	東京農業大学 地域環境科学部 造園科学科 准教授	R5.9.15
石川 善樹氏	公益財団法人Well-being for Planet Earth 代表理事 医学博士、予防医学研究者	R5.9.21
吉岡 泰之氏	株式会社gaz CEO 福岡市DXデザイナー	R5.9.21
定村 俊満氏	株式会社ソーシャルデザインネットワークス代表取締役社長 前・福岡市総合計画審議会 委員	R5.9.26
大西 晋嗣氏	九州大学 副理事、学術研究・産学官連携本部 教授	R5.9.29
西高辻 信宏氏	太宰府天満宮 宮司 Fukuoka Art Nextアドバイザー会議委員	R5.10.3
谷口 守氏	筑波大学大学院 システム情報系 社会工学域 教授	R5.10.4
佐々木 久美子氏	株式会社グルーヴノーツ 取締役会長 一般社団法人こどもDX推進協会 理事	R5.10.5
アリソン・バーチ氏	ステート・ストリート信託銀行株式会社 取締役 チーフ・オペレーティング・オフィサー 福岡営業所長	R5.10.5
西村 幸夫氏	國學院大學 観光まちづくり学部長・教授	R5.10.6
小川 全夫氏	九州大学 名誉教授 前・福岡市総合計画審議会 副会長	R5.10.11
藤沢 久美氏	株式会社国際社会経済研究所 理事長 福岡市雇用労働相談センター センター長	R5.10.12
樗木 晶子氏	福岡看護大学 学長	R5.10.17
星野 裕志氏	九州大学大学院 経済学府産業マネジメント専攻 教授 前・福岡市総合計画審議会 委員	R5.10.19
安浦 寛人氏	九州大学 名誉教授 前・福岡市総合計画審議会 会長	R5.10.20
サヘル・ローズ氏	俳優 子どもの家庭養育推進官民協議会 家庭養育推進アンバサダー	R5.10.27

木藤 亮太氏



福岡市は九州の核に

福岡市は九州最大の都市で、情報も文化も経済も集中し、九州を引っ張っていく力強さが強みですね。また、福岡や九州の人は“地域への愛”が強いと感じていて、例えば東京で、たまたま隣で飲んでいた人が福岡の人だったり九州の人だったりすると、妙に盛り上がりますよね。そういう文化は福岡や九州の土地柄だなと思うし、福岡人、九州人でよかったなと実感します。一方、仕事で福岡に転勤してきた方など、居住歴が浅い方たちは愛が少し薄いように感じることもありますが、時間が経過すると、シビックプライドが醸成されるのも福岡や九州のいいところかも。

私は、九州という一つの島をすごく大切にしています。例えばずっと東京に住んでいた人が、九州に魅力を感じ、一旦福岡に移住してみて、水が合ったのでさらに九州内の他県へ移り住んだという話をよく耳にします。逆に、福岡市がけん引してだけでなく、九州の各地方では地方ならではの課題解決が行われていて、そういった取組みが福岡市の参考になることもあります。福岡市と九州の各地方がもっと連携し、影響し合うことで、福岡市が核となりながら、九州全体がより良くなっていく未来が描けます。

商店街という「しくみ」の意義

大型店舗は、いわゆるナショナルチェーンのお店が並んでいてとても便利です。一方で、商店街には地域ならではの個店が並んでいて、地域でつくられたものが地域で消費され、経済が循環し、雇用や自然環境が守られるといった、消費者が地域と繋がるインターフェイスです。これからはそういった商売の裏側までしっかり考えていかないと、私たちの暮らしの持続が難しくなってくると思います。市内の商店街の中には「魚屋の親父さんがすすめる魚が今日は一番美味しい」といった、昔からある風習や人とのつながりがまだまだたくさん残っています。地域で消費することが地域の経済支援になり、風土を守ることに繋がります。福岡市は、都会でありながらそういった場所がしっかり守られているまちです。経済力や人口の規模、若い人も多いので、今からまだまだ頑張っていけば、福岡市内の色々な商店街がいい部分を残していけるんじゃないかと考えます。そのような発想が、福岡を起点に九州の各地方に広がっていき、その土地々々で努力されている各地の商店街に元気を与えていく、そんな未来が私の理想です。



これからの商店街の可能性

人が溢れ、すれ違うのも難しいような商店街の姿を知る私たちは、あの賑わいを取り戻そうとしがちです、でもなかなか難しい。一方で、今の若い世代の人たちは商店街が賑わっていた頃を知りません。物心ついたときから大型ショッピングセンターがあり、スマホで物が買える時代を迎えている世代。だからこそ若い人たちは、空き店舗が並ぶ商店街をマイナスに捉えるのではなく、逆転の発想で“新しいことにチャレンジできる場所”という見方ができる柔軟性を持っています。「サザエさん」や「ちびまる子ちゃん」には必ず商店街がでてきて、そこにはいつも笑顔が溢れています。日本人は「商店街があるまち」が好きなんです、DNAレベルなのかも。今の商店街に可能性・価値を感じることができれば、商店街の未来は描けると思います。諦めたら、そこで終了ですよ。

やはり、人に投資していくことが大事と思っています。行政の向き合い方としては、補助金などの直接的な支援よりも「商店街を盛り上げる人材や場所を発掘する」という間接的な支援によって、行政の手を離れても持続的に進んでいく「自走するまち」ができます。福岡市では、「商店街NEXTチャレンジャー育成事業」として今後まちを担うべき人材の発掘・育成に取り組んでいますが、商店街を何とかしたいという若い世代の人は毎年必ず出てきます。参加者からは、他の商店街の活動を知ることができた、横のつながりができた、相談ができる関係づくりができた、といった声も聞きました。そのような人を束ねて行動していくことで、商店街を次の時代に残せるのではないのでしょうか。

私に取り組んできたものとして、空き店舗を活用した企業誘致があります。昨今の企業誘致は大きな土地が必要なものではなく、IT関連企業のように小さな規模のものが増えています。そこで生まれたのが商店街の空き店舗にオフィスを誘致するという発想です。商店街には個性的で、美味しい飲食店もあります。お酒も飲めて、かつ銭湯なんかもあれば、商店街の中で全てが完結でき、あとは帰って寝るだけ、なんてこともできる。商店街で若い人が働くようになれば、天神や博多とは違う“新しい働き方”の可能性を感じますし、自然と商店街の消費も増えます。

商店街ってそもそもは起業・スタートアップが集まる場だったんですよ。“商売・ビジネス”にチャレンジする場。そう考えると、現代の商店街は、もはやお店が並んでいるだけではなくて、例えば高校生たちがそこでイベントに挑戦するとか、起業・創業がそこで生まれるとか、福祉や教育に関する活動とか・・・いわゆる“商業”とは違う機能、が商店街の中にインストールされていく、そんな発想がとても重要です。行政においても「商店街」という枠をいったん外して、ただ箱が並んでいる中で何ができるかどんなまちづくりができるのかという観点で取り組んでみる。それから“商店街”という看板をかけ直すと、きっと私たちが見たこともない新しいカタチの商店街ができていくのかな、そんな動きが福岡・九州を中心に広がっていけば、というのが私の想いです。



Profile

[プロフィール]

1975年生まれ。福岡県出身。九州芸術工科大学大学院修了(芸術工学修士)。福岡市の設計事務所に九州各地のランドスケープ設計や景観計画に携わる。2013年に宮崎県日南市が実施した全国公募で選ばれ、“猫さえ歩かない”と言われた油津商店街の再生事業に参画。約4年で25を超える新規出店、企業誘致等を実現。商店街再生の好事例として大きな評価を得ている。現在は那珂川市に拠点を置き、九州各地の地方創生関連の事業で活躍している。

浅野 直人氏



福岡市の強み

福岡市のまちづくりにおいて「緑の腕と緑の輪」という考え方が昔からあります。すぐ近くに山があり、その山に囲まれて街があって博多湾がある。博多湾に夕日が沈んでいく光景は、2000年前の弥生時代から全く変わっていません。これは福岡市の環境において、極めて重要な歴史的環境要素だと思います。これほどの人口規模で、ここまで自然に恵まれている都市は他になく、誇らなければいけません。福岡市の多様な食文化や郷土料理も、その豊かな自然の恵みによって支えられています。

1986年に策定された「福岡市環境プラン」では、福岡市の特徴として、豊かな自然環境があり、街の活力があり、潤いのある都市であるということが示されました。このプランは、翌年策定された「福岡市基本構想」にも反映されています。1992年には「ふくおか環境元年」が宣言され、環境省から「アメニティあふれるまちづくり優良地方公共団体」という賞を受賞しましたし、地域や世代を超えて豊かな環境を共有していく「環境にやさしい都市をめざす福岡市民の行動計画」も策定されました。福岡市に遅れて国が制定した環境基本法や環境基本計画には、福岡市の思想が色濃く反映されており、福岡市は自信を持っていると思います。

これからの環境政策

気候変動・脱炭素はこの10年が勝負です。海水温は一旦上がると1000年間は元に戻りません。人間の活動によりプラネタリー・バウンダリー（地球の限界）を超えると、自然資本の回復は非常に困難になります。例えば、生物多様性の喪失や土壌汚染は既に限界を超えており、早急な対策が必要です。今後は、プラネタリー・バウンダリーを超えず、それでいてソーシャル・バウンダリー（人が最低限の生活をする上で必要なライン）を維持できるようなバランスの中で生活をしていく必要があります。

環境政策の目指すところは何かということをも改めて考えると、Well-beingに行きつきます。環境負荷を低減し、自然資本を充実させることが、私たちの生活の質や生きがいにも繋がります。また、「自然のために自然を守る」のではなく、「人間のため、社会のために自然を守り、自然を活用することによって様々な社会課題を解決できる」という考え方もしっかり認識する必要があります。緑を増やすことで気候変動を緩和できますし、街路樹を整備することで街中での暑熱対策にもなります。福岡市でも、自然を活用した災害対策ができるかもしれません。

「カーボンニュートラル」も重要ですが、「ネイチャーポジティブ」という言葉も盛んに言われるようになってきました。自然を守るだけではなく、荒れてしまった自然を元に戻していく。つまり、生物多様性の損失が失われ続ける「ネガティブ」な状態に歯止めをかけ、「ポジティブ」な状態に反転させていくことが、ネイチャーポジティブの考え方です。これからもっと重要なキーワードになっていくと思いますし、2030年までに陸と海の30%以上を健全な生態系として効果的に保全しようとする「30by30」という国際目標も、福岡市は十分達成することができる可能性があると思います。また、大量生産・大量消費・大量廃棄の経済モデルから、資源の循環を前提とした経済モデルへの移行を示す「サーキュラーエコノミー」という言葉も非常に大事なキーワードです。これら3つの概念を上手に組み合わせながら、地域がしっかり自立し、地域と地域のネットワークがある「地域循環共生圏」を作っていく、そのような形の社会が望ましいです。

福岡市への期待

福岡都市圏や九州で「地域循環共生圏」を作っていく上で、福岡市の役割はすごく大きいと思います。例えば、福岡市が九州各地の森林の管理をサポートし、九州のネットワーク全体の温室効果ガスの削減に貢献するなど、他の自治体とのネットワークを構築していくことをしっかりと考えていかなければなりません。

また、福岡市が存在しうるのは、九州の各地域との繋がりによるということをしかりと認識し、打ち出していくことが大事です。例えば、食材は輸送のエネルギーがより少ないところから運ぶのが一番望ましいわけですから、九州で作られたお米を取り寄せて食べるのがいいと思います。福岡市で使用されている電力のほとんどは、九州各地で作られています。

逆に、情報や文化など福岡市が発信できるものはしっかりと発信し、各地域にも利用していただく。例えば、九州の若い人たちが福岡市に遊びに来て、そこで得たものを地域に持ち帰って活かされることで、福岡市が取り組んでいることは、福岡市だけの利益になるのではないということが言えると思います。

福岡市の良いところは、まちを歩いていると知っている人にたくさん会えること。東京ではこうはいきません。人と人が常に顔を合わせることができる距離感のまちというのは福岡市の特徴であり、まさにWell-beingだと思います。



Profile

[プロフィール]

1943年、愛知県生まれ。九州大学法学部卒業、九州大学大学院法学研究科博士課程中退、九州大学法学部助手を経て、1972年より福岡大学法学部に勤務、1980年より福岡大学教授。2014年、名誉教授就任。1993年から国の中央環境審議会委員を務め、2015年から2年間、会長に就任。また、福岡市をはじめ、福岡県、北九州市、太宰府市等多数の地方自治体の環境審議会会長等を歴任。長きにわたり、国・地方自治体の環境分野における法令・政策の立案、各種計画の策定等に深く関わる。永年の功績により、2023年4月、瑞宝中綬章を受章。

佐々木 一成氏



水素社会の見通し

政府は2030年に300万t、2040年に1200万t、2050年に2000万tの水素を使うという目標を掲げています。これは、2050年には天然ガスと肩を並べるくらい脱炭素燃料が使われる社会になっているということです。2050年と言うとすごく先の話に感じるかもしれませんが、世界的にはかなりスピード感を持った動きが進んでいて、日本も前倒しで取り組んでいく必要があります。

時系列で言うと、まず、現在の水素使用の代表的なものは乗用車ですが、年間の水素使用量は1000t弱です。これを、福岡市をはじめとして、トラック、バス、パッカー車などの商用車で使っていこうということで、そのための技術開発を今まさにやっているところです。商用車だと5万時間くらいの耐久性が求められますので、本格的に使えるようなトラックなどが出てくるのは2020年代後半になると思います。

次に、政府が約束している大きな数字として、2030年に発電の1%を脱炭素燃料による火力発電にすることを挙げています。2030年に発電するとなると、発電所を作るのに約2年、その前に設計があり、その前に銀行の融資や企業の投資が必要です。投資判断には国の支援制度が決まっている必要があります、水素・アンモニア政策小委員会と脱炭素燃料政策小委員会です。2030年頃に水素発電が始まると、水素の使用量は300万t規模に上がります。2030年代には、産業用途でも水素が使われる社会になるというのが国のロードマップです。

福岡市への期待

今後、九州では半導体の工場が増えますが、そこでも産業ガスとして水素をかなり使います。九州も水素が本格的に使われる社会に変わっていきます。そのときに九州で最も経済規模が大きい福岡市で、身近なところで水素が使われるようになると都市のプレゼンスが高まると思います。

商都である福岡市が牽引できる場所として、商用車を中心とした運輸の分野では福岡市が核になるのではないかと思います。



また、カーボンニュートラルな街として期待しているのが、箱崎の九大キャンパス跡地です。あれだけの土地で初めからカーボンニュートラルと明確に言えれば、地域の価値を上げることができますし、そのために福岡市がインフラからきっちり作るというのが箱崎の大きな魅力だと思います。本格的なカーボンニュートラルの街を福岡市が作り、それをモデルケースとして市内の他の地域や九州全体にも広がっていく、そのようなモデル地域を福岡市が先行して作ることが大きく期待されると思います。

アメリカやヨーロッパが兆円単位の投資をしていて、今、世界中で水素が取り合いです。水素の本質的な価値は、再エネを世界商品にできることです。つまり、その地域で使いきれない再エネを水素にすると世界中に運べる。それを輸入することも可能になります。

歴史を振り返ると、石炭、石油、天然ガス、みんな輸入になっていますが、脱炭素燃料も輸入なのか、海外に依存し続けるのかという問題があります。脱炭素燃料に変わっていくときこそ、国産のものも使えるエネルギー社会を作るべきです。バランスを取って、海外から安い水素を買ってくるとともに、国内で再エネ由来のグリーン水素もある程度確保する。そうなったときの福岡市の取組みとして、下水処理場のバイオガス由来の水素が有効に活用されることが大事だし、太陽光もかなり入っていて、玄界灘の風況もよく、洋上風力のポテンシャルも十分ありますので、国産エネルギーも使っているグリーンなリーダー都市、国際金融都市を作っていければ街の価値も上がると思います。

日本の中で、三大都市圏はエネルギー需要が多く、それを地域の再エネで賄うのは難しいため、輸入を全面的に打ち出す形になります。一方、北海道や福島県、山梨県などでは需要が少ない。人口が増えている福岡市は、需要が大きく再エネも使えるというハイブリッド型です。海外由来と国産のエネルギーを組み合わせられる大都市圏という意味で実はすごくユニークですし、箱崎のような地域をうまく使っていくと、モビリティとまちづくり分野の水素利活用にフォーカスした先進都市として、日本の先導役を果たせると期待しています。



Profile

[プロフィール]

1965年生まれ。1993年 スイス連邦工科大学チューリッヒ校工学博士号取得。

10年間の在欧後、1999年九州大学大学院総合理工学研究科・助教授。2005年工学研究院・教授。現在、副学長、水素エネルギー国際研究センター長、次世代燃料電池産学連携研究センター長。

主に、固体酸化物形および固体高分子形燃料電池の材料・プロセス研究に従事し、九州大学の「水素プロジェクト」を先導している。

岡澤 恭弥氏



福岡市の現状と今後の展望

この10年を振り返ると、スタートアップ特区、天神ビッグバン、博多コネクティッド、国際金融都市構想ということで、次の50年、100年を考えたときに必要なソフト、ハード両面の大きなテーマはしっかり押さえたと思います。これまで10年の福岡の努力は素晴らしくて、成長基盤を作るという意味ですごく大きな成果があったんですけども、次の10年はこの基盤を使ってどう成長させていくのかという意味ですごく重要です。シリコンバレーもテクノロジーが集積するまでに20年かかっていますが、基盤作りに10年、その基盤を使って成長するのに10年かかる。福岡市も他の都市と違う特徴、経済モデルを持った都市に生まれ変わる可能性があると思っています。

住みやすさと経済成長

香港やシンガポールは決して住みやすいとは言えないと思いますが、商売、ビジネスが成立する可能性が高いため、起業家や経営者、金融機関が集まり、都市として発展しています。一方、日本はこの30年間、住みやすいということに甘えて、経済成長をおごなりにしてきた部分があります。やはり経済成長をしていかないと、最終的には市民の幸せは充足されません。

投資家や起業家、富裕層の方たちと話していても感じますが、このままだとお金を持っている人たち、日本で仕事をしようと思っていた人たちが本気で海外に移住するという流れが出てくると思います。福岡市も海が近かったり食がおいしかったり、快適で素晴らしいんですが、そうした文化をエンジョイできるような生活水準にするためにも、経済成長を妥協せずに考えていく必要があります。

これから人口減少で国民の日々の生活、社会インフラを支える技術職や介護職といった人材が圧倒的に不足して来るので、そこをどう手当するか。他の政令指定都市に先んじて、海外からそういった人材を確保することにより、福岡が日本のビジネス都市として選ばれる可能性も高くなると思います。また、国内での高度人材の移住において、国際的な教育環境の不足が障壁になっているのは間違いないです。

教育というのはものすごく大きな無形資産で、福岡で国際的な教育を受けて育った子どもたちが、福岡から世界に出て行って福岡に戻ってくる。福岡の文化が素晴らしいと思う人がたくさんいるのは間違いないですが、実際に福岡で過ごし、福岡で教育を受けた人たちが福岡の素晴らしさを世界中に広めてくれる。教育や文化という無形資産があれば、福岡の魅力が世界中に伝播して、福岡に住むことを考える人たちが増えてくると思います。

金融資本と人的資本

国も地方も企業も同じですが、経済を牽引するのは資本です。資本には金融資本と人的資本の二つしかありません。シンガポールは金融資本が充実しているので、国としての中期経営計画にヘルスケアと人材教育を入れたんですね。要は金融資本はあるから、人的資本さえ確保できれば国の経済がずっと回っていくとわかっているわけです。

福岡市でも、新しい資金循環を引き起こせる金融機能を、国際金融都市構想で強化していく。IT産業のような無形資産価値、知的財産価値にもしっかり資金を提供できるようにして、金融資本のデザインを、新しい産業を育てるデザインに変えていく必要があります。

また、福岡市には素晴らしい大学がたくさんあります。まちが実装したいIT企業のエンジニアとして即戦力になれるよう、ブロックチェーンならブロックチェーンの技術を持つエンジニア、DXだったらコーディングできる学生をもっと育てるというように、もっとリアルな産学連携が必要です。世界中で人材の争奪戦になっているので、即戦力になる人がいれば企業が福岡に来ますよ。福岡はまだ人口が伸びていて若い人もたくさんいるので、子どもたちを宝と思って、真剣に勉強させるということだと思えます。次の10年本気でやれば、福岡で仕事があって、成功できて、スタートアップに資金がついて、ユニコーンになって、というモデルができると思うんですね。

これから10年の政策は金融資本、人的資本を徹底的に考え抜く。そして九州のリーダーとして、九州全体を俯瞰した政策をやることによって、10年後に福岡が西日本のリーディングシティになっている可能性も十分あると思っています。



Profile

[プロフィール]

1993年慶應義塾大学経済学部卒。1993年UBS銀行入行以来、外資系金融機関で28年間ニューヨーク、ロンドン、東京、香港で活動。2020年10月に福岡市国際金融アンバサダーに就任。2021年からはMCPジャパンホールディングス代表として、気候変動、Web3.0、教育の3つのメガトレンドが日本経済再成長の契機となる取り組みを行う。2022年1月Animoca Brands株式会社共同創業者兼最高投資責任者に就任。2023年2月にアニモカブランド創業メンバーと株式会社STOKを創業、金融資本、人的資本、自然資本にワンストップでアドレスするサービスを企業や行政向けに提供している。

福岡 孝則氏



福岡市の強み

福岡市が推進している「一人一花運動」や「都心の森1万本プロジェクト」は、目標が分かりやすく打ち出し方もすごく上手なので、市民の方々も一生懸命活動されているようですね。今後は、緑の量だけではなく質を多面的に捉えていくことがポイントになってくると思います。ヒートアイランド現象の緩和や防災減災、生物多様性など、様々な観点で緑の性能を打ち出し、福岡市のグリーンを考えていくことが肝要です。

福岡市は比較的早い時期から公園に民間活力を取り入れています。官民の連携が活発で距離感も近く、動きが早いというのは福岡市の強みだと思います。地場企業がしっかりいて、いろいろなパワーを持った人たちがいるというのはすごく良いことですので、そういう人たちの力を引き出しながら、自治体として実現したいことをきちんと打ち出していくことが大事だと思います。

都心部の緑

ニューヨークはセントラルパーク、東京は皇居や日比谷公園のように、都心部に大規模な公園緑地の骨格がありますが、福岡市の都心部を見ると、まだコアとなる緑が足りていないように感じます。舞鶴公園と大濠公園にはセントラルパーク構想がありますし、緑の骨格となる須崎公園や警固公園などの公園群はありますが、緑のネットワークを作っていくことが大事だと思います。

そこで大事になってくるのは川の系統で、中心市街地から海までの軸、ウォーターフロントまでのネットワークをどうやって作っていくかが課題だと思います。今、天神ビッグバンや博多コネクティッドで、公開空地や壁面、屋上に緑化がなされ、視覚的には華やかに見えますが、建築と緑のバランスを考えると、より多機能で、質の高い緑のネットワークを再構築していく必要があります。

都市間競争を考えると、福岡市らしいオープンスペースの構造としては、ひとつはそういう中心となるような大きいセントラルパーク。また、水辺のオープンスペースのネットワークについても、まだまだ伸びしろがあるのではないかと思いますね。

これからの方向性

これから、福岡市が目指す「人と環境と都市活力の調和がとれたアジアのリーダー都市」の実現に向けて、特に「環境」を高めていくことが重要だと思います。今、サーキュラーシティとカリジェネラティブシティといった言葉がトレンドになっていますが、福岡市が今後も選ばれる都市であるためには、地域の中でエネルギー、食、人が循環するというように、まちのコンセプトをアップデートして、それをアピールしていくことが大事だと思います。

また、福岡市は空港から中心市街地へのアクセスの良さ、立地の良さも高く評価されていますが、これからは広域のウォークアブルシティという視点で、周辺の自然へのアクセスや、自転車、健康・スポーツ、アウトドアといったポテンシャルを活かしていくともっと良くなると思います。さらに九州全体を見ると、渓谷や森などの様々なランドスケープ資源がありますので、そういったところへのアクセスも含め、福岡市が九州全体を引っ張っていただければと期待しています。



オープンスペースを核にした都市再整備(南町田グランベリーパーク)

Profile

[プロフィール]

1974年生まれ。神奈川県出身。ペンシルバニア大学芸術系大学院ランドスケープ専攻修了。海外のランドスケープ事務所にて都市・環境デザインプロジェクトに携わった後、現職。オープンスペースやグリーンインフラをテーマとした研究を推進するほか、コートヤードHIROOや南町田グランベリーパークなどにおいてランドスケープデザインを手がけ大きな評価を得る。

石川 善樹氏



福岡市の魅力

普段東京にいる人間として、福岡市に来るのはすごく楽しみにしています。コンパクトで交通の便がとても良く、多様な体験ができますよね。山もあれば海もあるし、都会的な部分も田舎の穏やかさもある。こんなに「ちょうど良い」都市は、日本でも唯一無二だと思います。

また、福岡市には、元気で自由に活動している人が多い気がしています。言動も多様で、面白い人がたくさんいると感じます。歴史的にも日本の玄関口だったので、いろいろな人を受け入れることが伝統として根付いていて、外から来た人がずっと入りやすいと思いますし、入ってきたものを時間をかけて自分たちのものにしていくという日本の特徴を体現しているのが福岡市だと思います。

もう一つ、福岡市の特徴として、九州からどんどん人が入ってきて入れ替わっている中でもWell-beingな若い女性が多いように思います。それは福岡市が、若い女性に限ったことではありませんが、自分がどう生きていくのか、どう生活していくのかという選択肢が多いからという気がします。いろんな価値観を持った人が、ずっと溶け込みやすい街だと思います。

Well-beingの本質

Well-beingが今なぜ注目されているのか。Well-beingの本質は、選択肢と自己決定なんです。どんな状況にあってもWell-beingへの道は開かれています。これがいい、これは駄目と人に強制するのではなくて、多様性を認め、選択肢を用意して自己決定を尊重することなんです。

例えばWell-beingの観点から健康づくりを推進する場合の成果指標は、「自分が良いと思える健康行動を取っている市民の割合」なんです。週1回美術館まで歩いて、脳がいろいろな刺激をもらうのが自分にとっての健康づくりだという人は、その行動を取っていればいいんです。

そうすると、選択肢が少ない人たちに選択肢を増やすというのがWell-beingの政策です。既存の施策でも実は選択肢がたくさんあるのに、選択肢として認知されていないことも多いので、それはきちんと広報する。例えば最近の「ねんきん定期便」を見ると、年金の受給開始時期が選べるのが分かりやすく表示されています。受給開始を遅らせると月々もらえる額が増えますよ、というのを選択肢として提示されているのですが、実際に遅らせるという自己決定をされる方が増えているそうです。これは何も強制してないんです。年金を受け取るのは60歳からでもいいし、70歳からでもいい。生活のあらゆる場面において、選択肢を

提供し、自己決定が尊重されているのか、一つ一つ見直していくことがWell-beingにとって大事だと思います。

教育で言うと、最近では放課後教育の選択肢を広げる取組みが全国で広がっています。放課後の教室には空間も道具もあって、そこで地元住民やNPOなどのいろいろな主体が、例えば音楽とか英語とか書道とか図工とか多様なプログラムを展開する。子どもたちにとっても多様な体験を選択し、自己決定できる場になるので、Well-beingな人が増えますよね。

政策の方向性とWell-being

福岡市が例えば国際金融都市を本気で目指すのであれば、やはり外国人に来てもらわないといけませんので、その人たちのWell-beingのために選択肢を増やす必要があります。そうすると、外国人の教育環境をこういうかたちで充実させようとか、そういう政策になると思います。あるいはスタートアップを推進するのであれば、失敗しても何度でも安心して再チャレンジできる選択肢を用意して、起業家のWell-beingを大事にする必要があります。

マスタープランというのは全方位で、すべての人たちを対象にするわけですが、そういう中でも優先順位をつけて、選択肢が足りない部分を支援していく。Well-beingというのは、そういうシンプルな話なんです。一人ひとりの多様性を認め、選択肢を増やし、最終的な自己決定は市民に委ねるといって、昭和からするとかなりのパラダイムシフトが起きていると思います。



Profile

[プロフィール]

1981年、広島県生まれ。東京大学医学部健康科学科卒業、ハーバード大学公衆衛生大学院修了後、自治医科大学で博士(医学)取得。公益財団法人 Well-being for Planet Earth代表理事。

「人がよく生きる(Good Life)とは何か」をテーマとして、企業や大学と学際的研究を行う。

専門分野は、予防医学、行動科学、計算創造学、概念進化論など。

吉岡 泰之氏



福岡市の魅力と今後の展望

一市民として感じる福岡市の魅力は、海と山の両方を有しており、都心からのアクセスも良好でコンパクトに楽しめる点です。もう一つは、まち全体としてどこに向かうのかという大きなビジョンがクリアで、市民の方にもよく伝わっていることです。市全体としてのモチベーションや熱量のようなものを感じるので、福岡に住んでいて良かったと思っています。

今後10年を考えていく上では、技術が発展していく中で、福岡市がどういう個性を出していくか、技術を何に使うかがすごく重要だと思うんですね。まだ明確な答えは持っていませんが、日本で最も効果的なデジタルの活用を目指すことが良いのではないかと考えています。例えば内部的なコストカットもそうですし、対外的に提供できるサービスの質の向上など、デジタルを組み合わせた戦略でリーダーシップを取っていく方向性がいいのかなと考えています。

デジタル化へのチャレンジとリスク

DXデザイナーとして福岡市に入って最初に感じたのは、ゼロリスクではないということです。1回ここまで出してみようというのが通用する文化を福岡市は持っていると感じました。ゼロリスクは短期で見ると正解ですが、中長期で見るとすごく大事なものを逃してしまいます。行政も初めてのことは失敗するということを理解してもらおう。100点のデジタル活用ができていない自治体は存在しないということ、そしてリスクを取りつつ、福岡市はチャレンジしているということを、市民の皆さまに向けてコミュニケーションを図っていくことが大事だと思います。このチャレンジによって、成長スピードや推進力が変わってくると思いますね。

デジタルでのソリューションって行政が出すのは難しいんです。というのは、若い人から高齢者まで、属性が違う人を一括りにする。でもそもそもこのリテラシーや認識の違いは、とても大きい問題なんです。1ソリューション1デジタルツールで全員に対する正解を提供するというのは、非常に難易度が高いことなんです。できればセグメントを切り分けて提供すべきだと思いますし、対象者の幅が広がってしまうと、極端に言ってしまうと、高齢者の方が使えるものにするしかないんです。70歳の人をターゲットにサービス作るしかなくて、だしたらできることは限られますよね。

ただ、僕らが認識を間違っていたなと思った気づきの一つあって、高齢者の方って、ITリテラシーは低いんですが、そのツール操作ができないかというとなんかそんなことはなくて、乗っかってしまえば結構使ってくれるんです。最初は行政がサポートして伴走して、一緒に使ってみましょうというようなことをやれば、意外とその後も使ってくれると思います。そこは一つ視点として持っておくといいと思います。

デザインとまちづくり

日本が競争力を失った要因はデザインにあると思っていて、人は安いから物を買うんだと言われるとそうではないんです。本当に求めているものやライフスタイルの提案、ブランドを作っていくみたいなのが、実際はすごく価値があったよねというのが、この30年くらいだと思っています。今は課題解決をすればいいとか安くすればいいみたいな、その考え方を変えなければいけない時期で、その一つがデザインだというのが僕の中で出ている答えです。

出てくるデータや課題に対して、局所的に合理的に判断するのではなくて、何でその課題が生まれたかなど、背景の紐解きやそこに至るまでの心理、ユーザーの辿ってきたジャンルの整理など、そういうことをきちんとやり切る。そうすれば、本質的に求められるものが作れるようになっていくので、そういう面でデザインを生かしていきたいと思っていますし、DXデザイナーにデザインという言葉が入っている価値でもあると思っています。



Profile

[プロフィール]

1994年、福岡県生まれ。西南学院大学在学中にフリーランスのWebデザイナーとして活動。

新卒でZOZOTOWN子会社の株式会社アラタナでUIデザイナーに。

福岡市発のスタートアップ株式会社PearのCDOを経てデザイン業務や採用チームの立ち上げ、組織マネジメント業務の経験を活かし、2019年6月株式会社gazを創業。2021年より福岡市DXデザイナーに受嘱。

定村 俊満氏



福岡市の強みと課題

福岡市は「ユニバーサル都市・福岡」や「福岡100」といった先進的な施策に積極的に取り組んでいて、それは他都市と比べてもすごく優位な点だし、子育て支援も充実していると思います。一方で、こうした施策が市民に十分届いているかと言うと疑問に感じていて、様々な支援を市民にどうやって伝えていくかは課題だと思います。

「ユニバーサル都市・福岡」の理念は、すべての施策に関わることで、事業はそれぞれの部局で展開されると思いますが、例えば子育てのような個別のテーマについてワンストップの情報拠点をつくるというような仕組みが必要です。

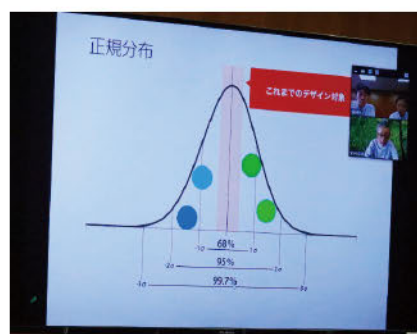
福岡市には認知症の人たちを支援するベースも既に整っているの、例えば企業が認知症の人たちに向けた新たな製品やサービスを開発するマーケットとしての強みも持っています。商品のデザインだけでなく、高齢者の生活を快適にして幸福感を生み出すような仕組みがデザインできると福岡市の強みになると思いますね。

多様性と自由

これまでのデザインは、例えば身体能力の正規分布で中央の68%の人たちを対象にできたんです。それはこの人たちを対象にすると、数が売れるからです。でもすべての身体能力が中央に収まる人はいないんですよ。

例えばジェット機の操縦席を作るときに、パイロットを何百人か集めて平均値でデザインしたところ事故が多発したんです。すべてが平均値という人はいませんからね。そしてアジャストという考えが出てきたんです。洋服で言えばSサイズ、Mサイズ、Lサイズくらいは揃っているけど、まだカバーできない人はたくさんいますよね。

つまり「標準」という考え方が怪しいということです。多様性、ダイバーシティが重要になります。すべての人の尊厳を守ることは大切ですが、さらに大事なことは選択することができる自由です。例えば車いすの人が電車に乗るときに、事前に鉄道会社に連絡をしておくと、出発地や目的地で駅員さんがついてくれますが、気が変わって途中下車することはできません。つまり、選択肢が少ないんですね。



幸福感とユニバーサルデザイン

国連が発表していますが、主観的幸福感を左右するのは一人当たりのGDPなど6項目が挙げられています。その中で注目したいのは「他者への寛容性」、つまり多様性の認識と受容だと思います。どうしても経済の方に視点が行きがちですが、年収が600万円を超えると、それ以上に年収が増えても幸福感は大きくは増えません。日本の社会の幸福感を左右するのは経済だけではないということです。

多様性と言うのは、女性や障がい者が総理大臣になったり、認知症の人や車椅子の人が健常者と同じ生活を楽しめるということです。そういう多様性を大事にすることが、市民の幸福感を高める大きな要因になります。

ユニバーサルデザインの根本は、お互いを尊重できるかどうかということにあって、お互いに認め合うことが、その人の幸福感を高めるんです。だから僕は「ユニバーサル都市・福岡」の「みんながやさしい、みんなにやさしい」というコンセプトが好きなんです。

身体が多様性、能力が多様性、文化が多様性、価値観が多様性、思想が多様性などをどれだけ受け入れられるまちになるか。多様性を本当に尊重できるまちにすることが、市民の幸福感を高めるんだと思います。



Profile

[プロフィール]

1951年北九州生まれ。九州芸術工科大学画像設計学科卒業。1976年(株)ジーエータップ入社、2015年同代表取締役社長退任。現在(株)ソーシャルデザインネットワーク代表取締役社長。(社)日本サインデザイン協会常任理事。山口大学工学部非常勤講師。福岡デザイン専門学校非常勤講師。サイン計画、ユニバーサルデザインの専門家であり、福岡市営地下鉄七隈線トータルデザイン、九州大学小児医療センター環境デザイン、JR西日本新幹線博多駅環境デザイン等を手がける。受賞多数。

大西 晋嗣氏



福岡市に来て感じたこと

関西から福岡に来て3年半になりますが、まず驚いたのは交通インフラの充実ですね。地下鉄はもちろん、空港も新幹線もすごくアクセスが良い。この立地の良さは住みやすさとイコールですので、よく計画されていると思います。そして福岡には食文化と芸術があります。これらは日常に欠かせないものですので、普段使いのまちとして価値があるし、すごく住みたくなると思いますね。

また、街に活気があって、例えば高齢者の方もカジュアルに街を歩いていますし、市民が物事に対して肯定的というか前向きというか、新しいことを取り組むときにすごくやりやすい空気があると思います。九州大学の学生も当たり前のように社会課題に関わる仕事をやりたいと言っていて、街全体がそれを応援している雰囲気があります。これは福岡では当たり前なのかもしれませんが、他都市には無い特徴だと思います。

スタートアップへの支援についても圧倒的に優れていますよね。他都市も取り組み始めてはいますが、まだ定着しているとは言えません。FGNがランドマークになって、スタートアップの見本と言えば福岡市だよねというのは全国で言われていて、市のホームページを見ても、支援事業がかなり使いやすい。ネーミングも含めて、ユーザーにとって、ここに頼めばいいということがわかりやすいんですよ。そういう一つ一つが優れていると思います。

産学官連携が目指すもの

大学がどれだけ共同研究を獲得したとか、知財収入が増えたかということも大切ですが、産学官連携の大きな目指す姿は、産学官連携によって雇用を創出したり、地域を活性化したりすることなんですね。私達のリソースというのはサイエンスと高度人材の輩出なので、この二つを福岡に定着させることが必要な取組みだと思っています。

福岡市も産業クラスターを作るのはうまいんですが、大学の研究成果とかディープテックを育成するような産業クラスターというのは、日本全体を見てもなくて、その育成投資というのはやはり絶対必要だと思っています。従来のように大学だけが一人相撲で研究成果の商業化を目指す時代ではなくなっています。大学がイノベーションの出発として産・学・官が共同体として拠点を形成する必要があります。



ベルギーのimecが有名ですが、海外では大学の基礎研究をベースに、民間の研究所が技術を育てて、民間企業やスタートアップに渡すということをやっています。例えばこの技術はこの大学が強くて民間のニーズもあるんだけど、そこを繋ぐ法人がないというときに、自治体は何十億と投資して、その技術を育てる会社を作るんです。そこを集積場所にするすることで、高度人材が定着して産業が育っていくんですね。

九大伊都キャンパス周辺エリアの方向性

研究成果の商業化というのは、一般的なスタートアップ支援とは性質が違われ、時間感覚も違われ、投資の方法が異なると思うんですね。私たちが目指す事業の方法としては「いとラボ+」をさらに拡大して、大学の近くで大学の研究に極めて近い開発会社を作って、そこで大学ではできない研究開発をやって、それを既存の企業にプロジェクト移転したり、あるいは大学でプロトタイプを作ったりということが必要だと思っています。

それともう一つは、九州大学で修士や博士を取った高度人材が、当たり前のように東京に流れてしまっている。その流出を止めたり、一旦は東京に行ったとしても、後々福岡に戻ってくる人を増やしたりしていく必要があると思います。そのためには、大学に近く、大学のリソースを商業化に使えるというこの伊都キャンパス周辺エリアの圧倒的なメリットを活かして、高度人材が集積する産学官連携の一大拠点をつくらしていきたいですね。



Profile

[プロフィール]

1977年生まれ。2003年(株)クボタに入社し先行技術開発に従事。2007年関西TLO(株)に入社、2013年同社代表取締役社長就任(～2018年6月)。2017年京都大学産学官連携本部を兼務して、2018年6月に京大オリジナル(株)の設立および同社取締役就任(～2020年3月)。

2020年4月、九州大学学術研究・産学官連携本部(現オープンイノベーションプラットフォーム)教授に着任、九州大学の産学連携支援業務に従事、2020年10月より、九州大学副理事として学術研究・産学官連携本部のマネジメントを担当。その他、大学技術移転協議会代表理事、RTTP(国際認定技術移転プロフェッショナル)。

西高辻 信宏氏



福岡市の魅力と課題

福岡市は様々なものがコンパクトに集まっていて、太宰府、糸島といった市外の歴史や自然にもアクセスがよいですね。都市と自然や歴史、文化がミックスされているのが福岡の魅力だと思いますので、都市機能が充実していく中でも、そういった「ミックス感」という魅力を保っていくことが大切だと思います。

文化的な視点で言うと、良質なエンターテインメントが都市の中に内蔵されていくと良いと思います。例えばルーブル美術館は22時前まで開いている日もあります。福岡市美術館も良い作品が揃っていますので、日中だけでなく、もう少し遅い時間まで入れるようになると、福岡に来た方が仕事後に行けるようにもなって、とても良いのではないかと思いますね。

アートの重要性と日本の風土

アートは、人生やモノの見方、様々なものを豊かにしてくれます。難しいのは日本ってどうしても「静かに鑑賞しましょう」という文化なんですね。海外の美術館や博物館で、絵の前に子供たちが座って、学芸員の人や先生がファシリテーター役になって、絵についてどう考えるかを話し合う姿を何度も見ました。そうすることによって、一つの作品にも様々な見方、解釈があるということを認識して、アートにはこれだけ幅広さがあるということを幼い頃から経験として学べるんですね。

日本の慣習を変えるのはなかなか簡単ではないと思いますが、例えば美術館でも、時間帯や曜日によっては会話をしてもいいよというように、子供たちをそこに連れて行くだけではなくて、その中でさらにどう考えるかという場をつくるまでデザインしていく必要があるように思います。



福岡市への期待

Artist Cafe Fukuokaに行きましたが、地道に取組みを重ねていくことで効果が出てくるものだと思いますので、是非続けていってほしいですね。アーティスト・イン・レジデンスに関わった作家が将来的にどんどん飛躍することもありますので、ちゃんとバックアップしながら、どこかに作品を残していくことが大切だと思います。FaN Weekのようなイベントも、長期的な視野で向かうべき方向性をちゃんと決めた上で継続してやっていくことで、認知度が高まり、参加者も増えていくのではないのでしょうか。

市民とアートの距離感に関しては、都市の真ん中にギャラリーがちゃんとあって、そこで良い作品が展示されてオープンになると、人は集まってきます。そこでアーティストと接したり会話したりする機会が生まれてくると、アートが市民にとってもっと身近なものになっていくと思います。例えば福岡アジア美術館も、作品とコンセプトは本当に素晴らしいと思うんですが、アクセス、場所の分かりにくさがハードルになっていますので、その辺りが工夫されるともっと良くなると思っています。

また、福岡市の観光資源について考えた時に、歴史的な資産や文化的なもの、そして自然が全部噛み合って、連動してくるともっと輝いてくると思います。そういう意味で資源をさらに磨き上げていくためには、都市圏の視点をより拡げて見るが必要になってきます。

例えば海外に行く時に、その都市だけではなくて周辺に何があるかということも調べますよね。そこは情報が連動している方がものすごく良いし、わかりやすい。外から来る人は、ここが福岡市内か市外かなんて意識していないんです。日本では、どうしても情報が行政単位で区切られているので、もっと広い視野で見て、福岡市がハブ的な機能を持ちながら周辺の都市と連携していくことを目指して欲しいと思います。



Profile

[プロフィール]

昭和55(1980)年、福岡県太宰府市生まれ。御祭神 菅原道真公から数えて40代目に当たる。東京大学文学部歴史文化学科(美術史学)卒業。國學院大學大学院文学部神道学科で神職資格並びに修士号取得後、太宰府天満宮に奉職。現代美術に造詣が深く、平成18年(2006)に立ち上げた太宰府天満宮アートプログラムでは、ディレクターとして展示企画に携わる。

谷口 守氏



都市の成長に合わせた交通

福岡には月1回くらい来ていますが、人口も増えているし、様々な活力ある取組みがされていて、日本一元気があるまちという印象を持っています。七隈線が博多駅まで延伸され、交通面での利便性も圧倒的に高まりましたが、唯一、地下鉄のキャパシティが足りていないことは課題だと思っています。増便を検討するとともに、地下鉄を補強する意味での地上部の交通をどう考えられるか。都市の成長に合わせた「交通」を考えていかないといけないと思います。

都心の活動レベルが上がり、人も増えているので、自動車交通をいかに抑制して都心の空間を歩いてもらえるようにするか。ウォークブルな都市として、博多駅、中洲、天神のエリア全体で歩行者ネットワークを考えてもよいのではないかと思います。外から来た人たちが地上にある様々なまちの資源を全然目にせず、地下鉄の点と点だけで動いてしまうのは、経済効果から言ってもかなりロスしている部分があります。都心部が面的に混雑しているなかでは、公共交通への利用転換を促すモビリティマネジメントなどに取り組んで自動車がうまく抑えられていないといけません。例えばLRTを入れて地下鉄の負荷を下げるようなことと、人が地上に出てくるように促すことをセットで考えてもいいのではないのでしょうか。

ライフスタイルの変化に対応した都市づくり

コロナ禍を経て、市民のライフスタイルや交通行動にも変化が生じていますが、テレワーク等が広がり、サイバー空間を有効に活用する働き方、暮らし方が浸透してきた中で、実空間とサイバー空間のちょうどいい使い方がどんなものなのかをあらためて考える段階に入ってきているように思います。生活圏や人の行動が変わってきているのであれば、それに合った都市づくりを考えていくことが重要です。パリ、メルボルン、ポートランド、エジンバラといった海外の都市では、身近な生活圏で必要なサービスにアクセスできるようなまちづくりをしたほうが良いのではないかという考え方も出てきています。



都市構造については、都心部から身近な生活圏まで様々な階層があり、拠点の特性に応じた都市づくりを進めていくことが重要です。商業、文化、福祉など様々な都市機能がありますが、都心部以外でも、例えば広域的な拠点には若者が行きたくなるような機能が必要だと思います。また、拠点間をつなぐ交通はもちろん、シェアモビリティも重要で、ターミナルや乗り換え拠点、交通結節点をどうしていくかという話は、非常に重要になってくると思います。

これからの福岡市を支える交通体系

都心部を中心に混雑する中で、地下鉄の次の階層として、スムーズに動ける地上交通のようなものがあっていいと思います。そして、公共交通への乗り換え拠点が郊外等にあって、サブの交通を集約した上で都心まで来る。その交通の軸みたいなのをきちんと設定したうえで、階層的なネットワーク構造で、なるべく公共交通に乗ってもらう。モビリティマネジメントなどの取組みとあわせて、なるべく多くの市民の皆さんが、自動車に頼らずに公共交通を快適に活用できるような、そういう方向に、よりアクセルを踏んでいただけたら良いと思います。



Profile

[プロフィール]

1961年生まれ。京都大学工学部卒業後、同大学において工学博士取得。京都大学助手、筑波大学講師、岡山大学教授などを経て、2009年より筑波大学教授。

専門分野は、都市・地域計画、交通計画、環境計画。

国土審議会・交通政策審議会専門委員や、社会資本整備審議会 都市計画・歴史的風土分科会長など、国の審議会等の委員を多数務めている。

佐々木 久美子氏



幼少期からのテクノロジー教育

TECH PARK(小中学生がテクノロジーと遊ぶアフタースクール)は、私自身が、会社を経営しながら小学生の子どもを安心して預けられる場所があれば、という想いで作りました。私も小学生の頃からパソコンを触っていましたが、ガジェットは道具なので、幼い頃から触って慣れ親しむことによって、鉛筆や消しゴムと同じように、当たり前前に便利なものを道具として使う感覚が芽生えてくると思っています。リテラシーの向上はDXのベースなので、費用負担の課題が解決すれば、本来は老若男女、満遍なくやりたいと思っています。

子どもの居場所という意味では、子どもが家庭や学校以外で過ごせる場所が少ないように思います。サードプレイスとしてどういう場所がいいのか、考えてもいいかもしれないですね。学びをベースにすると、親としても何かを学んで帰ってくるとなれば預けやすいし、子どもも自分が成長していると思える場所になる。今日はすごい寿司が握れるようになったとか、メレンゲを立てられるようになったとか、様々な体験を通じて、何かをできるようになって、本当に好きになるのがいいですね。その点、コンピューターはとても良いと思います。

データを活用した政策立案

子育てをしている人のWell-beingと独身のWell-beingは違うので、何をもって指標とするかはなかなか難しいと思いますが、例えば「申請数がいくつ」とかではなくて、足を使って本当のデータを取得していくことが重要だと思います。市のイベントやLINEでアンケートを配ったり、学校で保護者と子どもにアンケートを取ったり、いろいろな軸で生の声のデータを蓄積していった上で政策を決めていく。それは行政だからできることだと思うんです。あとは蓄積したデータをどう分析していくかですね。

福岡を教育国際都市に

私の会社で外国人を何人か雇っていましたが、福岡には外国人コミュニティが無いと言って、東京に引っ越してしまうことが多かったんです。子育ての相談をする場所が無くて苦しんでいる外国人も多いので、そういう人たちの声も聴いていく必要があると思います。



海外からIT教育やグローバル教育のレベルが低いと思われることも課題ですね。TSMC(台湾積体回路製造)も熊本だけで完結するのではなくて、福岡は空港も近いし、生活コストも東京に比べたら全然安いので、受け皿になるはずなんです。東京にあれだけ人がいるのはインターナショナルスクールなど、高度な教育の選択枠があるからです。東京一極集中の問題に本気で取り組むのであれば、教育のレベルを上げることはすごく重要だと思います。そうすると様々な事情や思想をお持ちの方々が子育てをするときに福岡を離れなくて良くなるので安心です。

どういう職種の人たちが福岡から生まれる可能性があるのかをカテゴライズして、「福岡はこれだけすごい人が生まれる教育国際都市だ」と言ってもいいかもしれないですね。韓国のソウルは福岡のベンチマークだと思っていて、大学にも外国人がたくさん来ているんです。国内だけの需要ではなくて海外でも通用するように考えるところは圧倒的に日本が負けているので、もっと海外の方々にも選ばれて、福岡に住んでいることが自慢できるような都市になっていくと良いと思いますね。



Profile

[プロフィール]

福岡県生まれ。小学5年生からプログラミングを学び、プログラマーやシステムエンジニア、プロジェクトマネージャー等を経て、2011年に会社設立(株式会社グルーヴノーツ)。これまで交通系、医療系Webシステムや、クラウドやモバイルを利用したサービスの開発を行う。働き方や、女性の社会進出、子育て支援、DX支援について、会社を中心として、様々な工夫をして独自の取り組みを行っている。

アリソン・バーチ氏



福岡市に企業進出した理由

私が初めて福岡市に来たのは1980年代のことです。交換留学生として佐賀に行くため、福岡に降り立ちました。その後も年に数回は福岡に来ていましたが、オープンでウェルカムな都市という印象でした。早い時期から英語、中国語、韓国語の多言語表記がありましたし、若者が楽しめる場所もたくさんありました。今は福岡に住んでいますが、オープンでウェルカムで楽しめる場所という印象は変わっていません。

グローバルな視点で見ると、ステート・ストリートが福岡に拠点設置を決めた理由の一つは、空港へのアクセスの良さです。東京との行き来もしやすいですし、アジアへの国際線の接続が良いことも重要なポイントです。アジアの玄関口というスローガンのとおり、福岡は数千年にわたるアジアとの交流の中で、グローバルなものに対するオープンなマインドセットが醸成されていると感じます。それは弊社のようなグローバル企業にとって大切なことです。

また、東京や香港と比べて活気があり、新しいものを受け入れる土壌がありますね。この10年、様々な変化があったと思いますが、福岡は常に新しいものを見つけてそれを受け入れています。10~11年前、福岡に拠点を設置したときはBCP(事業継続計画)が目的で、配置する社員は30人という計画でしたが、アジア太平洋地域の顧客サポートに適した場所であることから、その業務のために、今では26国籍の200人の社員が働いています。

福岡の強みは、良い大学がたくさんあり、すごく前向きで課題解決のマインドセットがあることに加えて、いろいろな国籍の方がいる多様性に富んだ場所だということです。交通網が整っていることや、東京と比べて不動産がリーズナブルであることも魅力です。できればもっと多くの外資系企業を誘致していただきたいですし、スタートアップ支援も、もっともっと取り組んでいただきたいと思いますね。

外国人の生活面における課題

外国人が住む場所として福岡市と香港を比べた場合、大きな違いは英語でのコミュニケーションです。香港では中国語と英語が公用語であり、市役所で何か手続きをする場合も英語で事足ります。英語でコミュニケーションが快適にできることは外国人にとっては重要です。福岡も努力していると思いますが、グローバル都



市を目指すのであれば、英語でのコミュニケーションがたやすくはないことは障壁になると感じます。

また、住む場所を探すときに外国人は苦勞しています。外国人への賃貸を躊躇う家主が多いので、自分も日本人の夫の名義で家を借りました。外資系企業を誘致していくのであれば、こうした部分も改善していく必要があります。

3点目に指摘したいのは教育です。日本の教育はとても質が高いと思いますが、日本語が話せない方々へのさらなるオプションが必要だと思います。例えば一つの公立小学校をバイリンガルで教える学校にするという手法もあるのではないのでしょうか。旧大名小学校がスタートアップセンターに変わったように、インターナショナルスクールを作れることもできると思います。福岡のインターナショナルスクールも、東京でトップレベルのスクールと同じくらい質は高いと思いますが、規模が小さくて入れない子どもがいるのは課題ですね。

さらに言うと、国際的な医療アプローチをもっと取り入れていく必要があると思います。外国人の医師を増やすことを考える必要があるし、日本の医療技術の高さは海外でも評価されていますので、メディカルツーリズムのポテンシャルもあると思っています。

福岡での働き方

私がキャリアをスタートしたのはニューヨークで、1988年に東京に移りましたが、当時は仕事ばかりしていました。仕事仕事というのは、長い目で見ると社会にとって良くないことだと思います。

福岡では、7月の山笠のときに仕事を忘れてコミュニティを優先する文化がありますが、これはとても良いことだと思います。1年間の中で、仕事を優先する時期もあるけれども、家族やコミュニティを大事にする時期もあるというようにバランスを取っていくことが大事だと思いますね。

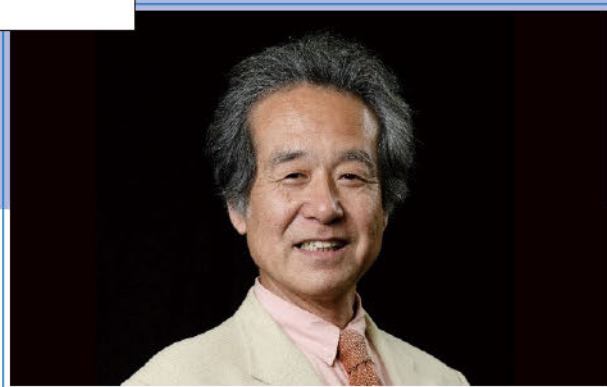


Profile

[プロフィール]

2022年4月ステート・ストリート信託銀行(株)入社。2022年6月に取締役 チーフ・オペレーティング・オフィサー 福岡営業所長に就任。入社以前は、35年に渡り、米国・日本・香港におけるJPモルガン・チェース及びシティ・グループにて、オペレーション・テクノロジー・財務・人事・債券部門の責任者を歴任。米マサチューセッツ州マウント・ホリーヨーク大学アジア学部にて学士号取得。同志社大学の日本留学プログラム参加。佐賀県伊万里市の高校へロータリークラブ交換留学の経験も持つ。

西村 幸夫氏



都心を共有できるまち

福岡は、まちの規模感として市民が「都心」のイメージを共有できるまちですよ。東京、大阪、名古屋の規模になると、都心と言ってもそれぞれが持つイメージがバラバラで共有できないんですよ。福岡は、みんなが都心を共有して話が通じる最大規模のまちだと思いますね。

都心がコンパクトでうまくネットワークされているので、川沿いなど、歩くことをもっと戦略的に取り入れていくといいと思います。福岡と博多がそれぞれに競い合ってきた歴史があって、その中間に天神があるという他の都市にはないユニークな都市構造なんですよ。福岡城の跡地周辺というのは、また別の大きな核として魅力を持てるはずで、それぐらいの塊が都市の中にある。西は西新、東は香椎というように、地域拠点を中心に全体が繋がっている都市としての政策を打つことができるいいと思います。

残っているものを活かす景観づくり

より良い景観を作っていく上で、福岡は古代以来の歴史が蓄積して現在に至っていますので、そういうものがうまく手がかりとして活かされることがすごく大事だと思っています。戦争で焼けてしまったところもありますが、寺社仏閣は残っているし、参道も残っているので、そうしたものをまずは大事にする。古典的なお寺や神社の周りを、もう少し面で頑張るようなことをやらないといけません。いろいろなものがストーリーとして残っているので、そういうものを景観を考えるときの基礎にして、引き継いでいくことが大事です。

明治通りを見ても、北側にもう一本道路ができたことで車道の幹線にならずに済んだんですよ。ロンドンのオックスフォード・ストリートのように、あの幅員、あのスケールにこだわりながら、歩行者の道も確保してきたわけです。そういうものとして成立できているということは、先人たちの努力に感謝しないといけないと思いますね。

地域の人にも外の人にも魅力的なまちへ

地域の個性を磨くというのは、どの地域でもやるべきことで、魅力的なまちができれば住んでいる人は嬉しいし、そうするとやはり外からも人が来ます。観光客側の目線で考えることも大事ですが、地域の側から考えて魅力的な景観ができれば、それが外の人にも魅力的に映るのは当然だと思います。

一方で地域の側だけを考えすぎると、一人よがりになるんですね。自分たちが住みやすければよくて、外から来るのは迷惑だと言うのではなく、やはり地域で経済を回していくとか、外部の経済を多く取り込むということも考えなければなりません。特に人口減少、高齢化が進んでいくと、そのパイがだんだん小さくなっていくわけですから、周りから関心を持ってくれる人たちを増やすという意味では、外の人々の目線で考えることも必要です。

景観形成というのは、誰が見ても良いと思うような魅力的な景観を作っていくということですから、住んでいる人にとっても外から来る人にとっても良いわけですね。景観は一目瞭然なんだけれども、そこには深い背景があります。みんなが共有する都市景観ですから、まちづくりの計画においてはすごく重要だと思いますね。



Profile

[プロフィール]

1952年、福岡市生まれ。東京大学都市工学科卒、同大学院修了。明治大学助手、東京大学助教授を経て、1996年東京大学教授。2018年東京大学名誉教授。アジア工科大学助教授、MIT客員研究員、コロンビア大学客員研究員、フランス国立社会科学高等研究院客員教授、日本イコモス国内委員会委員長、文化庁参与などを歴任。世界遺跡記念物会議（ICOMOS）元副会長、ICOMOS名誉会員。専門は都市計画、都市保全計画、都市景観計画など。工学博士。神戸芸術工科大学教授を経て、2020年より國學院大學教授、2022年4月より同観光まちづくり学部長。

小川 全夫氏



産業と雇用の創出

この10年を振り返ると、人口フレームの拡充に関して福岡市は随分頑張ったと感じています。若者の定着に関しても一定の成果を上げました。一方で、少産多死化が進む中で生じてくる問題点について、今後、市民にどのように認識してもらうかというのは課題だと思っています。

福岡市は踊り場経済で、学生を集めて大学まで育て上げても人材が福岡を出ていってしまう傾向があります。この問題については、市内に雇用力のある産業をもう一段大きく育てる必要があります。例えばツーリズムで言うと、これからは欧米や中国、韓国だけでなく、東南アジアや南アジアがターゲットになりますが、福岡市には外国語大学が無いので異文化理解や通訳をできる人材が育っていません。そういうところに力を入れるとツーリズムの雇用力がぐっと高まると思いますね。

医療福祉の分野も隠れた雇用力を持っています。この分野は社会保険制度の枠中でやっている限り、なかなか賃金を上げられないんですよね。そこで枠組みを少し変えていく。例えば病気の子が見えた段階で民間のドラッグストアやフィットネスクラブの健康づくりに繋ぐというように、既存の医療や介護に委ねるだけでないバイパスシステムができてくると大きな経済になります。世界経済もケア経済に舵を切っていますので、高齢者だけではなく保育や教育にもケア力の強化に力を入れていくべきです。福岡市の推進している「福岡100」の価値は世界銀行も認識しているし、各国が福岡にかなり関心を持っています。福岡市はケア経済のパイオニアとして訴えていくことが課題ですね。

これまで福岡は、都市活力を高めることによって生活を豊かにするという方針でやってきましたが、これからは逆に生活の豊かさから産業の新しい活路を拓くという視点で考えていくことも必要だと思います。例えば若い人たちが音楽、アニメ、エンターテインメントがある生活を求めているとすれば、その人たちがそういう分野の仕事ができる産業環境をつくる。あるいは元気な高齢者がどんな生活をしたいかを考えて、例えばバスの運転手で定年を迎えた人でも働ける生活交通や観光交通分野で仕事をつくっていくという発想転換が必要だと思います。

これからの市民生活と広域的な役割

これから福岡市が人気の高い都市になっていくことは間違いなくて、海外からも優秀な人材、高収入の人材が入ってくるような都市になってほしいと思いますが、ソフト産業で大きく成功したサンフランシスコやシアトルでは、インドや中国から所得の高い人材が集まって家賃が高騰しました。その結果もともとそこに住んでいた住民が住めなくなって周辺都市に転出せざるを得なくなりました。福岡でもそのようなことにならないように考えておく必要があると思いますね。

外国人材にとって住みやすい居住区を作って、そこに行けば国際性もあってインターナショナルスクールから何からすべて整備されていて、生活コミュニティとして成り立っているというような多文化地域共生構想がいいように思います。

また、福岡は女性の雇用力がかなり高いのですが、特にサービス産業系で働いている人たちの雇用条件は決して高くはないと思います。あまり良くない労働条件で働いていた女性が老後を迎えると、行政にとっては重荷になってしまう可能性があるのです、そのあたりは考えていく必要があります。それから少子化問題についても、生まれた子どもの方ばかりを向くのではなくて、子どもを産む世代の女性や家族支援に向けての多面的な政策も考えていかなければならないと強く感じますね。

もう一つ福岡市の特徴として、港湾都市ということがありますが、港湾都市であり鉄道の拠点があり、空港もある都市だからこそ、外来動植物侵入対策、人間の感染症予防、検疫体制や隔離施設といった政策を一体的に考えていかなければなりません。いわゆるワンヘルス政策です。

また、空路と陸路と海路の繋ぎを演出することもやっていく必要があります。例えば仕事モードで来た人たちに、仕事を忘れさせるような非日常的な体験ができるような演出があるといいですね。空港でミュージシャンが演奏をしたりアニメを見せたりすれば、待ち時間の印象が変わるし、それが新たな需要、新たな仕事にも繋がっていくと思います。



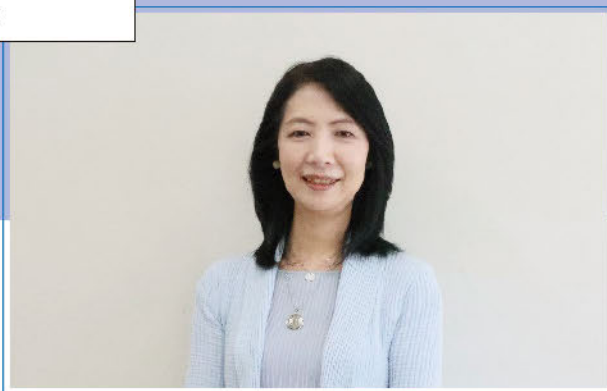
最後に、広域行政に関して言えば、お互いに無いものを補い、良いものを交換し合っていく地域間交流が重要です。例えば焼酎文化というものは、鹿児島、宮崎、熊本のローカルな文化要素でしたが、福岡に来た人たちが焼酎文化に接して全国に広がったんですよ。こういう風に福岡が、日本、そして世界というマーケットのプラットフォーム機能を強化することで、九州全体にバリューチェーンを張り巡らせていくことができると思いますね。

Profile

[プロフィール]

台湾生まれ。鹿児島大学文理学部卒業、九州大学大学院文学研究科修士課程修了。久留米大学博士(文学)。九州大学・山口大学名誉教授。任意団体アジア・エイジング・ビジネスセンター代表、福岡アジア高齢社会デザイン協議会 会長。アジア太平洋地域の人口高齢化に関わるアクティブ・エイジング政策、地域開発計画、地域保健福祉政策等の調査研究とプログラム開発支援を行う。

藤沢 久美氏



スタートアップの成長に足りないもの

福岡は動きが早く、まちが新しくなっていく空気感があるので、人の意識がすごく前向きでイノベティブになっている感じがします。その中でスタートアップへの支援として、こうやったらうまくいくというようなタクティクスやテクニックはたくさん教えていると思いますが、視座を上げるという部分はまだ足りていないように感じます。

経営者にとって、視座の高さや視野の広さはすごく大事です。私はこの17年間、上場したばかりの社長に毎週インタビューを続けていて、もう900人ぐらいになりますが、そういう人たちは経営のことだけではなく、人間として視野が全然違うんですね。100年先の世界はどうなっているとか、そういう大きいものを持っているので、スタートアップもビジョンを大きくしていく支援が必要だと思います。

スタートアップにいきなり大きな絵を描けというのは難しく、大企業が、世界がこうなったらいいよねとか、このマーケットってこうなったらいいよねという大きい戦略を描いて、持っている信頼やネットワークをうまく生かしながら、提供するサービスやインフラの進化にスタートアップの知見を使っていく。福岡がどうすればもっと生活しやすい場所、ビジネスしやすい場所になるかっていうところに大企業とスタートアップが連携する枠組みを作ると、結果としてスタートアップも伸びるし、大企業も拠点を持つことができると思います。

もう一つは、私自身、ダボス会議でヤンググローバルリーダーに選んでいただいて、世界中のトップリーダー、国家元首や大企業を作ったような人たちから、当たり前と思っている価値観をガンガン打ち破られていくっていうチャンスをいただいたんです。そういう機会をどれくらい作れるかというのはすごく大事なことになるので、福岡が音頭を取って、日本中、世界中のスタートアップが視野を広げる機会を仕掛けられたら、すごくみんな変わっていくと思います。

そのときに、誰でも参加できるのではなくて、選ばなければいけない仕組みを作ってみんなが頑張ろうと思うことがすごく大事。FGNに入るにはどうしたらいいですか、FGNコミュニティに入るにはどうしたらいいんですかっていう人が増えてくるのがすごく大事だと思います。



福岡市への期待

原体験を持っていると何が何でもやりたいと思うので、そういう人にこそ支援をするべきだと思います。市民に耳を傾けてみると、原体験的課題を持っている人はたくさんいると思うんですね。そういう人たちに裾野が広がると高さも出てくるはずですよ。

バルセロナでは、地域の課題をどうやったら解決できるか、市民がディスカッションしたりワークショップしたりする仕組みがあって、そうするとみんな市政に関わりたくなくて投票率も上がってきます。また、デンマークでは幼稚園から民主主義教育をやっていて、すべて自己責任で、自分たちの地域は自分たちで作るし、自分らしさみたいなものも育てています。

市民が市政に関わって、実際に自分が動けば世の中が変わる、小さくていいからプロジェクトを動かし始めるみたいな仕組みをどれだけ作れるか。そうすると問題発見に対するアンテナが高くなる。本気で市にコミットしたいと思っている人が増えて、地域の課題解決のために動いているかという視点で、投票率を指標にするのもいいと思います。

新設事業所数のような基礎的な指標もいいけれど、ピュアな起業と第二創業に加えて、Bコープとかゼブラ企業みたいな、社会課題を解決しながら、ちゃんと収益も上げるという企業の指標もあるといいですね。Bコープはグローバルスタンダードで、日本では10数社しかいません。福岡が、日本中の「やりたいのにできない」という人が集まってくる場を提供して、その人たちのハードルになっているものを取り除いてあげればできると思うんです。

ナイジェリアでは、デジタル系のスタートアップが国づくりをしていて、それは問題がたくさんあるからこそできるというのと、もう一つは規制が無いからできるんです。福岡もルールをできるだけフリーにして、ルールメイカーズはグローバルからどうぞ来てくださいと。海外から日本に来ると、日本はルールがややこしくて嫌だと言って辞めて帰ってっちゃうんですけど、福岡のここだけは、あなたたちが嫌だと思っているルールを改善できますみたいな。そこに市役所の職員の人たちも入っていくといいと思いますね。



Profile

[プロフィール]

大阪市立大学卒業後、国内外の投資運用会社勤務を経て、95年に日本初の投資信託評価会社を起業。99年、同社を世界的格付け会社スタンダード&プアーズに売却後、2000年にシンクタンク・ソフィアバンクの設立に参画、2013年から22年3月まで代表。2022年4月より現職。

07年、ダボス会議を主宰する世界経済フォーラムより「ヤング・グローバル・リーダー」選出、08年、世界の課題を議論する「グローバルアジェンダカウンシル」メンバーに選出され、世界40カ国以上を訪問。

樗木 晶子氏



福岡市の魅力と課題

福岡市は、生活面でも文化面でも娯楽でも自然でも、すべてが程よく揃っていて、すごく暮らしやすいまちです。災害も少ないし、交通もすごく便利だし、全国転勤されているような患者さんや製薬会社の方たちと話しても、住みやすいという声は多いですね。

一方、若者が働く場が少し限られていることと、突出した大きな強みが無いところは課題だと思います。例えば韓国を見てみると、政府や行政がこれをやると決めたらそこに一気に資本を投入しますので、IT産業にしても女性活躍にしても日本を追い越しましたよね。日本人はみんな仲良く温厚にという文化なので、そうしたエネルギーや激しさみたいなものは少し足りないように感じています。

医療と健康サービス

日本人は、健康に関して国や自治体への他力本願が強すぎるんですよね。アメリカは健康保険がすごく高いし、銃社会に象徴されるように、自分の命は自分で守るという認識で発展してきました。一方、日本には国民皆保険制度があって保険で医療がカバーされています。すごく医療にアクセスしやすい環境ですので、患者さんにとっては恵まれています。ものすごく医療費がかかっています。

若い人が減っていく中で、今のままの医療でよしとしていると、医療経済的に立ち行かなくなって、本当に救うべき病気の人が病院にかかれなくなる状況になります。これからは本当に必要な医療と健康サービスを区別して行って、健康サービスに属するような医療については、市民の理解、コンセンサスを得て、保険から外していく。そのためには子どもたちからの教育も必要でしょうし、高齢者に納得してもらうのはなかなか難しいかもしれないけれども、時間をかけて啓発していく必要があると思います。

健康都市をめざして

自治体の保健師さんたちは熱心に活動されていますが、保健師さんと人口の比率を考えると保健指導には限界がありますので、別の仕組みを使ってもっとシステムティックにやっていく必要があると思います。

その一つは、給食を減塩して野菜を増やすことです。給食で味覚を減塩に慣らせば、三つ子の魂でずっと続きますからね。コンビニのお弁当やカップラーメンは、一食で一日分の塩分を摂ってしまっています。高血圧の患者さんは、入院して病院食になるだけで降圧剤がいなくなりますので、コンビニのお弁当を一斉に減塩するだけで高血圧の薬は半分くらいになりますよ。

もう一つは、産業保健からのアプローチにシフトしていくことです。例えば健康産業の企業をターゲットにして、社員食堂やお弁当を減塩したり、健康診断のデータを活用したり、保健師さんたちも協力して、社員を健康にするモデルケースを作るんです。そうすると大きな企業であれば自社で健康保険組合を作っていますから、予防活動は保険金をセーブすることに直結しますよね。その成功事例を他の企業にも広げていくという進め方です。

日本のように健康診断が充実していて、データも管理できている国は他に無いと思うんですよね。そこにさらに歯科健診のデータを紐づけていくと、世界には無い、日本ならではのすごいデータができるんですよ。それを福岡市が先駆けてやっていけば世界中から注目されます。住みやすいだけではなくて、市民の健康づくりをすごく推進している都市、アジアからモデルにしたいと思われるような健康都市になっていくことを期待しています。



Profile

[プロフィール]

福岡県出身。九州大学医学部医学科卒業、同大学院医学研究科修了。同大学病院循環器内科入局、米国留学、九州大学病院・助手、講師を経て、九州大学医学部保健学科・助教授の後、教授。きらめきプロジェクトキャリア支援センター副センター長、九州大学総長特別補佐、九州大学医学部保健学科長を歴任。2020年4月より福岡学園客員教授、福岡歯科大学医科歯科総合病院健診センター長。2023年4月より現職。

星野 裕志氏



福岡市の強みとこれからの課題

この10年を振り返ると、SDGsやコロナ、天神ビッグバンなどで環境は大きく変わりましたが、総合計画の戦略面や大きな方向性については、見直しが必要という状況には至らなかったように思います。一方で、KPIは戦術ですので、次の計画では、急速な環境の変化や目標達成手法などの変化に応じて、適宜見直していった方がいいと思います。

福岡市の強みはアジアとの近接性ですが、まだ十分に活かしきれていません。“人”にフォーカスすると、これから人口減少に入っていく中で、留学生や働きに来る外国人が快適に過ごせ、且つ、この方々の能力を活かせる環境を作るべきだと思います。日本はもはや賃金レベルだけでは、魅力的な国とは言えません。例えば、人手が必要な企業と職が必要な留学生をマッチングするような雇用の仕組みを作れば、「日本に行くなら、勉強ができて仕事もできる福岡に行こう」となるのではないのでしょうか。これは外国人のためだけじゃなく、福岡のため引いては九州の持続的な成長となり、アジアとの近接性も活かす一例かなと思います。新しい仕組みが必要です。

また、今後、福岡市のさらなる成長に向けて、海外からの直接投資を呼び込むためには、本社機能にこだわるのではなく、地域拠点を誘致することも必要だと思います。例えば日本で事業を展開している外資系企業のサプライベースを福岡に置く。例えばパナマという国は、パーツセンターやサプライベース、技術者など、中南米の企業のサポート機能を集約したハブになっていますが、福岡も地理的優位性からパナマと同じ役割ができるのではないかと思います。

国際都市を目指す中で、国際性において他都市より一歩先に出るためには、街で困っている外国人に対して市民が普通に「May I help you?」と話しかけるようなレベルになれば、「福岡って日本の中でもちょっと違うね」という好印象に繋がると思います。そのためには、福岡インターナショナルスクールのような組織とも連携して、初等教育のレベルから国際性を育てていくことが非常に重要だと思います。

以前、神戸に住んでいましたが、世界的な多国籍企業であるネスレ、P&G、アセア・ブラウン・ボベリ（ABB）などが、日本の拠点や極東のヘッドクォーターを神戸に置かれていました。「なぜ東京ではなく神戸なのですか」との質問に対して、3社とも「社員のQOL（クオリティ オブ ライフ）です」「子弟の教育が非常に充実しているから」と言われていました。つまり快適な環境と良いインターナショナルスクールを持つということは、海外からの投資においても、非常に重要な要素といえます。

博多港の重要性と人流・物流の将来展望

博多港は、雇用や経済効果など、福岡市にとってとても重要な意味を持っていますが、一般的に市民の間でも横浜や神戸と違って、福岡が港町だという認識はあまり持たれていません。そこはもっと博多港のプレゼンスや存在意義というものを市民に伝えていく必要があると思います。2024年問題が目前に迫って、大量輸送機関へのモーダルシフトが必要な中で、博多港がフェリーや鉄道などトラックの代替輸送機関への積替拠点として、港と空港と鉄道などを有機的に繋げていくことで、さらに大きな役割を担うことも必要です。

また、クルーズに関して、かつて博多港は日本一の寄港回数を記録しましたが、これからは数だけを追うのでは無く、近隣の港との連携が重要だと思います。今後、博多港が寄港地として再び国内で突出することは難しいかもしれません。クルーズ旅行の中で、博多港がどのような魅力を提供できるのかということ意識しながら、近隣の港湾と棲み分けながら戦略的アプローチを考えることと、博多港発のクルーズにもさらに注力する必要があります。インバウンド頼みではなく博多港からの乗船客を増やすこと、訪問先としての魅力の向上、寄港先としての福岡でより消費を促す仕組みを作っていくことなど、まだまだ考えられるのではないのでしょうか。

人流・物流については、さらに活発化させていくことは当然だと思いますが、世界では確実にキャッシュレスが進展しているので、インバウンド客向けの交通機関利用のシームレス化などを進めていくことは、喫緊の課題だと思います。

そして、福岡空港については7時から22時という離発着制限を前後に30分ずつでも緩和できないか。そうすれば始発に乗って、東京の都心部での会議に頭から入れるし、福岡空港の利便性がさらに高まるのではないのでしょうか。都心部の空港だからこそその制約もやむを得ないかもしれませんが、福岡空港の並行滑走路の完成を見据えて、抜本的にどのようなやり方をすれば可能になるかを考えていったほうが良いと思います。



福岡空港も一つの例ですが、何かを変えようと思ったらできないことを前提とするのではなく、求められているものに対してどのように対応できるかという発想をしないと、「そこそこの福岡」、「便利で快適な地方都市」になってしまうと思っています。

福岡はまだ幸い人口が増えるので、その間に次のステージに向けて、仕込みをしていくことが肝要だと思います。

Profile

[プロフィール]

慶應義塾大学法学部政治学科卒業(法学士)。米国ジョージタウン大学経営大学院修了(MBA)。日本郵船株式会社、神戸大学経営学部・経済経営研究所 助教授を経て、2003年4月より九州大学経済学研究院。2007年4月から2009年3月まで産業マネジメント専攻長。

神戸大学、タイ国立Mae Fah Luang University客員教授。2011-2012年、2015年、2017年米国コロンビア大学客員研究員。日本海運経済学会 理事(前会長)。多国籍企業学会 理事。国際ビジネス研究学会 理事。ケース・メソッド研究会 主宰。九州ベトナム友好協会会長。

安浦 寛人氏



生活の質の向上と都市の成長の好循環

この10年間、いろいろな統計データで福岡だけが伸びていますが、それは夢をしっかり作ってきたことが大きいと思います。「生活の質の向上」の財源は「都市の成長」が無いと保てないし、雇用が無ければ人も集まらない。そういう流れをしっかり捉えて、二つの軸を抑えた基本計画を作れたので、市民にとってもわかりやすかったように思います。

生活の質に関しては、考え方がどんどん変わってきています。例えば広い家に住めば、その分コストがかかるし、自転車は当たり前のようにシェアリングする時代になっているわけです。教育の質、医療の質、そういったものも含めて、福岡流のWell-beingとは何なのか。それを行政としてどう測定し、評価していくのかが問われていると思います。

一方、都市の成長に関しては、人口増加による成長がもう望めない中で、新たなテクノロジーを活かした成長というものを世界中が模索していくことになります。人口をはじめ、いろいろな物理的なデータは下がるけれども、人々の満足度は上がり、税収も伸びて、それが生活の質の向上に繋がっていくという好循環が生まれれば、福岡の魅力は増していくと思いますね。

成果指標のあり方

今の計画の成果指標には、時代遅れなものがいくつか出てきています。今まで使っていたデータが意味を持たなくなってきたら変えていく。例えば「公民館の利用率」という指標がありますが、利用率を上げることに一生懸命になるのが良いことなのか問い直しましょうということです。各地域に市の施設があり、公共に対する思いを持った方々が管理していることには意味があるので、集会を開く場所ではなく、コワーキングスペースとして使えるようにWi-Fi環境を整えるというように、時代に合った活用をしていくことが大切です。

市民の意識に関する指標についても、これまでは紙で調査してきたわけですが、今の時代はスマートフォンを使えばもっと簡単に多くのデータが集まるはずですね。そこで各世代からランダムに選ばれた人をモニターとして定点観測を行っていく。そうすることによって、ブームとして起こる議論に対し、バイアスがかかった世の中の雰囲気には流されるのではなく、冷静に判断できる仕組みを持つことが大事だと思います。



九州における福岡市の役割

様々な産業において、工場は九州各地にあっても、世界各国や東京、大阪との交流拠点は福岡にあります。例えばTSMCの工場が熊本に進出してきて、台湾の人たちは福岡空港から入ってくるわけですね。工場で作るものを設計する場としても福岡の役割は大きい。それは世界の半分のシェアを占めるスマートフォンのカメラの撮像デバイスが百道浜で設計されていることから既に証明されています。そういう知識集約産業を集約する場として、福岡の果たす役割というのは非常に大きいと思います。

実際、百道浜には世界から人が集まっているわけですが、こうした国際的に移動していく人たちにとっては、教育環境や医療環境がすごく重要です。福岡に働きに来た人たちが次の都市へ移動するとき、その子どもたちにデジタルな国際証明書を発行して教育の継続性を担保できるか。これができるようになれば福岡の国際性は間違いなく伸びていくと思います。

20年、30年先を見据えて

20年前、我々はどんな生活をしていたか振り返ってください。電車やバスでは本や新聞を読んでいたが、今はみんなスマートフォンを見ています。そして10年後もみんながスマホを持っているとは思わないことです。

昭和32年、博多駅は祇園町にあって周辺は田んぼでしたが、百年橋通りの辺りまで土地区画整理事業をして、21年かけて267ヘクタールを整備しました。伊都キャンパスが273ヘクタールですから、それと同じくらいの街を作ったわけです。当初は反対する人もたくさんいたと思います。それから愛宕浜、百道浜、アイランドシティ、九大学研都市と、将来を見据えたまちづくりをやってきて今の160万人の福岡市があるわけです。

だからそういう大きな話が出てきたときに、それを馬鹿にしてはいけませんよ。そうすることで20年先、30年先、「福岡市はすごいことを考えてこういう政策を打ったんだな」というまちになっていると思っています。

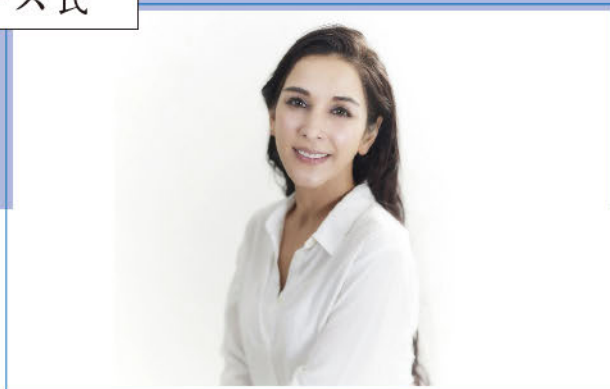


Profile

[プロフィール]

福岡県出身。京都大学工学研究科修士課程(情報工学専攻)修了。1980年京都大学工学部助手、1983年京都大学工学博士、1986年11月京都大学工学部電子工学科助教授、1991年九州大学大学院総合理工学研究科情報システム学専攻教授、2008年10月九州大学理事・副学長(～2020年10月)、2011年4月財団法人福岡アジア都市研究所理事長、2011年10月日本学術会議会員(～2017年9月)。

サヘル・ローズ氏



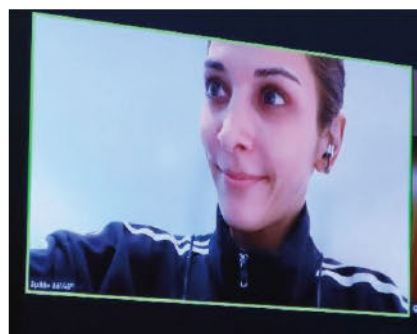
家庭養育や家庭支援の重要性

私は戦争のさなかに家庭を失い、イランで施設に入っていましたが、8歳の頃に日本に来て、養母、義父との生活が始まりました。施設では衣食住は整っていますが、一人の職員が多くの子どもを見る環境で、時間帯によって職員が替わるし、懐いた人が辞めてしまうことも多くて心が飢えてしまうんですね。家庭に入ると毎日同じ人が一緒にいてくれて、お腹がすいたら食べさせてくれて、泣きたいときに抱きしめてくれる。何より「1対1」の関係が嬉しい反面、愛されたことが無いので不安でした。

私も最初は一生懸命、親子になろうとしたんですが、「試し行動」が激しくて、物を壊したり、暴言を吐いたり、意味不明なことを言ったり、やはり注目されたかったんです。義父も最初は合わせようと頑張っていたと思うんですが、ストレスが溜まりに溜まって虐待に発展したんですね。大人が幸せを感じられなかったり、子どもとの関係がうまくいなくて自分を責めたり、そういう孤独が無意識に子どもに向けられることはよくあります。

結局、私の場合は養母と路上生活をして、地域のコミュニティが助けてくれたから良かったんですが、同じように孤立して誰にもSOSを出せない大人も子どももたくさんいます。大人が救われないと子どもが救われないので、大人を救う社会にならない限り、社会的擁護下の子どもたちが減ることはありません。社会や行政は子どもを主軸にしますが、子どもは理解しがたい行動を取ることがあります。そういうときに大人を悪者にしない、置き去りにしないことがすごく重要だと思っています。

世間にもっと家庭養育への関心を持ってもらって、子どもを引き取ったらどんなサポートが受けられるのかを知ってもらうことが重要です。子どもを家庭に迎え入れて叱ってもらう。怒られると反抗心が芽生えるので、反発しながら成長していきます。また、養親も里親も施設の職員も、失敗して子どもとぶつかって喧嘩して泣いて、その中で子どもは愛されていることを知るし、家族になっていけるんだと思います。



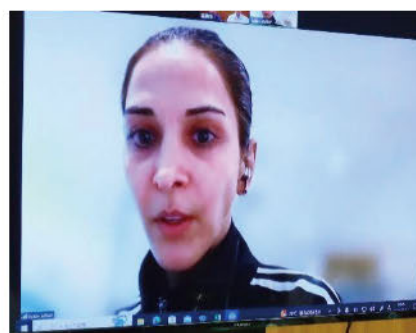
インターナショナル福岡の実現に向けて

日本にいる外国の方々は、例えばマンションの自治会で、定期清掃やお金の管理をやらうと思っても任せてもらえないこともあるんですよね。外国人にはできないという前提があるんですが、ルールを学んでもらって共生するためには、本人たちが実践していかなければわからないこともあります。例えば外国人の団体が祭りを主催して、地域への声のかけ方や書類の作り方を行政が二人三脚で教えてあげる。そうすることで彼らにも見えてくることがあるし、彼らの得意分野をみなさんが気づけると思うんです。

外国人にとって、日本が持っている技術や責任感はすごく見本になると思うし、日本で共存したいと思っている外国人が、インターナショナルな視点を日本に取り入れてくれる。そんな「インターナショナル福岡」として新しい取り組みをやっていってほしいと思います。

例えば外国人向けのパンフレットやマニュアルはあっても、そこに載っていない疑問があると、言葉がわからないからそこで終わってしまいます。行政がそれぞれの言語が得意な外国人を雇えば、その言語の人たちにちゃんと対応できますよね。そんなインターナショナルな窓口を作ることができれば、これは世界にも例がないことだし、もっとグローバルになると思います。

大人になってから新しい言語を習得するのはすごく大変です。子どもたちが早く言葉を習得するので、一生懸命、親の通訳をしたり、早く学校を辞めてアルバイトをしたり、そんなことが起きています。それを断ち切るためには、大人の居場所とやれることを作っていく。そうすることで子どもたちも変わってくると思うんです。今は分断社会になっていて、子どもも大人もみんな孤独になっているように思います。必要なものは人の縁。そのためには行政だけではなく、誰もが「大丈夫？」と声を掛け合えるような社会になってほしいと思っています。



Profile

[プロフィール]

イラン出身。イラン・イラク戦争のさなかに家族を失い4歳からイランの孤児院で過ごし、7歳で出会った養母と養子縁組。8歳で養母とともに来日し、高校生から芸能活動を始める。主演映画『冷たい床』では、ミラノ国際映画祭で最優秀主演女優賞を受賞するなど、映画や舞台・俳優としても活動の幅を広げている。第9回若者力大賞受賞。

国際人権団体NGOの「すべての子どもに家庭を」の活動では親善大使を務めた。個人的にも支援活動を続け、2020年にはアメリカで人権活動家賞受賞。

8 民間主導の取組み

福岡地域戦略推進協議会（FDC）が民間意見をとりとめるため、まちづくり団体や経済団体等と連携したイベント等を実施されました。

その結果を踏まえ作成された福岡市への提言をFDCより頂きました。

① 実施内容

- 専用ホームページからの意見受付 個人95件／団体22件
- 市内団体へのヒアリング
福岡商工会議所、九州経済連合会、九州大学、
We Love 天神協議会、天神明治通り街づくり協議会、博多まちづくり推進協議会
- 各種イベント開催
キックオフイベント「10年後の福岡を語る」(65名)
福岡テンジン大学・福岡未来創造プラットフォーム共催イベント「ふくおか未来会議」(54名)
UR都市機構共催イベント「Table Session Tenjin『10年後も働きたいまち』」(19名)
福岡音楽都市協議会共催イベント「音楽都市福岡の未来」(38名)
- FDC会員への意見聴取
FDC会員ワークショップ(35名)
産業創造部会(62名)、都市創造部会(73名)、デジタル部会(70名)



② 提言

- 「都市経営の基本戦略」のアップデート
- 4つの「目指す姿」と「施策の方向性」 など

提言 都市経営の基本戦略/目指す姿/施策の方向性 のイメージ

生活の質の向上と都市の成長の好循環は、新たなフェーズへ。
あらゆる「生活の質の向上」と「都市の成長」を統合的に考え、持続可能にする

Fukuoka New Standard 01
イノベーションが
継続的に生まれるまちへ
施策例) ・グローバル人材・高度人材の育成
・スタートアップの成長支援

Fukuoka New Standard 02
多様な人が共生するまちへ
施策例) ・高度人材(外国人)の快適な
生活環境の提供:教育・住居・医療

Fukuoka New Standard 03
最先端の技術で
日本一安心なまちへ
施策例) ・データ連携基盤の官民活用
・グリーンビジネス創出推進

Fukuoka New Standard 04
九州の玄関口として
ともに活力を生むまちへ
施策例) ・観光MICE都市としての強化
・世界への発信(シティプロモーション)

福岡都市圏・九州広域の中核都市として、相互裨益する成長を生み出す

Fukuoka D.C. ※上の絵は、福岡の良さがずっと(無限に)続いていくこと、生活の質と都市の成長に統合的に取り組んでいくことを表しています。



次期基本計画策定に向けた市民意見募集

みんなで作る
福岡市の将来計画
プロジェクト
実施報告書